

下渋民遺跡・勝善遺跡・根城館跡

発掘調査報告書

地域連携道路整備事業（一般国道343号渋民地区）関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな国土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、地域連携道路整備事業（一般国道343号渋民地区）に関連して令和元年度に発掘調査を行った下渋民遺跡・勝善遺跡・根城館跡の調査結果をまとめたものです。

今回の調査によって下渋民遺跡は縄文時代・古代の遺跡、勝善遺跡は縄文時代晩期の遺跡、根城館跡は中世の城館跡で、範囲が広がる可能性が高いことがそれぞれ確認され、往時の様々な環境を考える上での貴重な資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました県南広域振興局、一関市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和3年2月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 高橋嘉行

例　　言

- 1 本報告書は一関市大東町渋民字閑ノ上36番地2地先ほかに所在する下渋民遺跡、一関市大東町大原字勝膳52番地1地先に所在する勝善遺跡、一関市大東町大原字館下26番地ほかに所在する根城館跡の発掘調査の結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、地域連携道路整備事業（一般国道343号渋民地区）に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課と県南広域振興局土木部一関土木センターとの協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが受託事業として実施した。
- 3 岩手県遺跡登録台帳に登録されている遺跡コードと遺跡略号は次の通りである。

下渋民遺跡	遺跡コード	N F60-0267／遺跡略号	S S B-19
勝善遺跡	遺跡コード	N F61-1256／遺跡略号	S Z-19
根城館跡	遺跡コード	N F61-1240／遺跡略号	N J T-19
- 4 野外調査の面積・期間・担当者は次の通りである。

下渋民遺跡	令和元年7月1日～7月12日／溜 浩二郎・村上 拓・佐藤敬太
勝善遺跡	令和元年7月9日～8月30日／1,001m ² ／溜 浩二郎・村上 拓・佐藤敬太
根城館跡	令和元年9月1日～9月30日／929m ² ／溜 浩二郎・佐藤敬太
- 5 室内整理の期間・担当者は次の通りである。

下渋民遺跡	令和2年1月6日～1月31日／溜 浩二郎
勝善遺跡	令和2年2月3日～3月31日／溜 浩二郎・佐藤敬太
根城館跡	令和2年3月1日～3月31日／溜 浩二郎
- 6 本報告書の編集については、第Ⅰ章「調査に至る経過」は県南広域振興局土木部一関土木センターに原稿を依頼し、執筆していただいたものである。それ以外は溜が編集・執筆した。
- 7 基準点測量・航空写真撮影および遺物の鑑定は次の機関に委託した。

基準点測量	新栄技研（下渋民遺跡）、南部測量設計（勝善遺跡）、東開技術（根城館跡）
航空写真撮影	岩手スカイイメージング
石材鑑定	花崗岩研究会
- 8 本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図などは岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 9 本遺跡の調査成果は、すでに『令和元年度発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第721集）において発表しているが、内容については本書が優先する。
- 10 本書では国土地理院発行2万5千分の1地形図「千厩北部」・「陸中大原」・「折壁」・「沖田」、5万分の1地形図「陸中大原」・「千厩」を使用した。
- 11 遺構図中で記載した座標値は平面直角座標第X系（世界測地系）に基づく。
- 12 遺構図等の方位は真北を表示している。
- 13 土層の記載には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 立地と環境	
1 地理的環境	2
2 地形と地質	2
3 歴史的環境	7
III 野外調査と室内整理	
1 野外調査	10
2 室内整理の手順と方法	12
IV 下渋民遺跡	
1 遺跡の立地	13
2 調査の概要	13
3 基本層序	14
4 検出遺構	14
5 出土遺物	15
6 まとめ	15
V 勝善遺跡	
1 遺跡の立地	18
2 調査の概要	18
3 基本層序	18
4 検出遺構	20
5 出土遺物	25
6 まとめ	25
VI 根城館跡	
1 遺跡の立地	36
2 調査の概要	36
3 検出遺構と出土遺物	37
4 まとめ	37
報告書抄録	60

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	8	第5表 柱穴状土坑一覧	24
<下浜民遺跡>		第6表 縄文土器観察表	34
第2表 土師器観察表	16	第7表 石器観察表	35
第3表 石器観察表	16	第8表 石製品観察表	35
第4表 陶磁器観察表	16	第9表 土製品観察表	35
<勝善遺跡>		第10表 陶磁器観察表	35

図 版 目 次

第1図 遺跡位置図	3	第14図 2号炉、1・2号土坑	23
第2図 遺跡周辺の地形と調査範囲		第15図 柱穴状土坑（P 1～45）	24
<下浜民遺跡>		第16図 出土遺物1（土器1）	26
第3図 遺跡周辺の地形と調査範囲		第17図 出土遺物2（土器2）	27
<勝善遺跡・根城館跡>		第18図 出土遺物3（土器3、石器1）	28
第4図 地形分類図	6	第19図 出土遺物4（石器2）	29
第5図 周辺の遺跡分布図	9	第20図 出土遺物5（石器3）	30
<下浜民遺跡>		第21図 出土遺物6（石器4）	31
第6図 造構配置図	13	第22図 出土遺物7（石製品1）	32
第7図 基本土層	14	第23図 出土遺物8（石製品2）	33
第8図 出土遺物	16	第24図 出土遺物9（土製品、陶磁器）	34
第9図 1・2号溝	16	<根城館跡>	
第10図 3～5号溝	17	第25図 グリッドおよびトレンチ位置図	38
<勝善遺跡>		第26図 T 3断面図（基本土層）	38
第11図 基本土層	18	第27図 T 1・2断面図	39
第12図 造構配置図	19	第28図 遺跡範囲と調査区	40
第13図 1・2号炉	22		

写真図版目次

<下浜民遺跡>		<根城館跡>	
写真図版1 航空写真、調査区	43	写真図版9 航空写真1	51
写真図版2 調査前風景、基本土層	44	写真図版10 航空写真2、調査区1	52
写真図版3 1～5号溝	45	写真図版11 調査区2、基本土層	53
<勝善遺跡>		写真図版12 T 1～4	54
写真図版4 航空写真	46	写真図版13 出土遺物1（下浜民遺跡、勝善遺跡）	
写真図版5 基本土層、調査前風景、 調査区	47	写真図版14 出土遺物2（勝善遺跡）	56
写真図版6 1・2号炉	48	写真図版15 出土遺物3（勝善遺跡）	57
写真図版7 2号炉、1・2号土坑	49	写真図版16 出土遺物4（勝善遺跡）	58
写真図版8 柱穴状土坑、遺物出土状況、 作業風景、調査区	50	写真図版17 出土遺物5（勝善遺跡）	59

I 調査に至る経過

下浜民遺跡、勝善遺跡及び根城館跡は、一般国道343号浜民地区道路整備事業に伴って、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道343号は、陸前高田市を起点とし、一関市大東町を経由して、奥州市に至る内陸部と沿岸部を結ぶ重要な路線であり、東日本大震災津波の際も、被災者の救出、救援物資の輸送等に大きな役割を果たした。

当該区間は、急カーブや急勾配が連続し、歩道も整備されておらず、交通事故も発生し、安全で円滑な通行の支障となっていることから、問題箇所の解消を行い、機能向上を図るものである。

下浜民遺跡は、岩手県教育委員会作成の県遺跡台帳登録済、周知の遺跡である。当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県県南広域振興局土木部一関土木センターから岩手県教育委員会に対し、平成30年12月12日付一土セ第601号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた県教育委員会は平成30年12月26日に試掘調査を実施し、工事に着手するには下浜民遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成31年1月15日付教生第1406号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答した。

勝善遺跡は、岩手県教育委員会作成の県遺跡台帳に新規登録された遺跡である。一関土木センターから岩手県教育委員会に対し、平成31年1月24日付一土セ第681号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた県教育委員会は平成31年1月29日から同年1月30日に試掘調査を実施し、工事に着手するには勝善遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成31年2月20日付教生第1556号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答した。

根城館跡は、岩手県教育委員会作成の県遺跡台帳登録済、周知の遺跡である。一関土木センターから岩手県教育委員会に対し、平成31年1月30日付一土セ第754号「埋蔵文化財の分布調査について（依頼）」により分布調査の依頼を行った。

依頼を受けた県教育委員会は平成31年2月25日に分布調査を実施し、工事に着手するには勝善遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成31年3月12日付教生第1650号「埋蔵文化財の分布調査について（回答）」により回答した。

これらの結果を踏まえて当センターは岩手県教育委員会と協議を行い、発掘調査を公益財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受諾事業とすることとした。これにより令和元年6月28日付けで県南広域振興局長と公益財團法人岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、下浜民遺跡、勝善遺跡及び根城館跡の発掘調査を実施することとなった。

（岩手県県南広域振興局土木部一関土木センター）

II 立地と環境

1 地理的環境

一関市は、岩手県の最南端に位置し、南側は宮城県栗原市・登米市、西側は秋田県湯沢市、北は奥州市・西磐井郡平泉町・気仙郡住田町、東は宮城県気仙沼市と隣接する。

現在の一関市は、平成17年9月に1市4町2村、さらに平成23年9月には東磐井郡藤沢町が合併され、面積1,256.42km²を有し、人口は116,367人（平成31年3月31日現在）で人口・面積ともに岩手県内で第2位の規模を誇り、岩手県南・宮城県北の『中東北の拠点都市』として、経済・文化・教育の中心となっている。

気候は、岩手県内では比較的温暖な地域で市の西側は日本海側の気候の影響を受け降水量も多く、冬期間は雪に覆われる。対して、市の中央から東側にかけては太平洋側の気候に属し、冬期間も晴れやすい地域である。

調査を行った3遺跡は一関市大東町に所在し、大東町は市域の北東に位置し、東は陸前高田市、北は住田町・奥州市と隣接する。このうち下渋民遺跡は渋民地区・勝善遺跡・根城館跡は大原地区のそれぞれ西側に位置する。

下渋民遺跡のある渋民地区は地域的にはほ町の中央に位置し、町内の他地区全てと接している。さらに、一関市中心地をはじめ、西の奥州市水沢区、北の奥州市江刺区、東の陸前高田市町などに対してもほぼ等距離にあり、交通の要衝となっている。

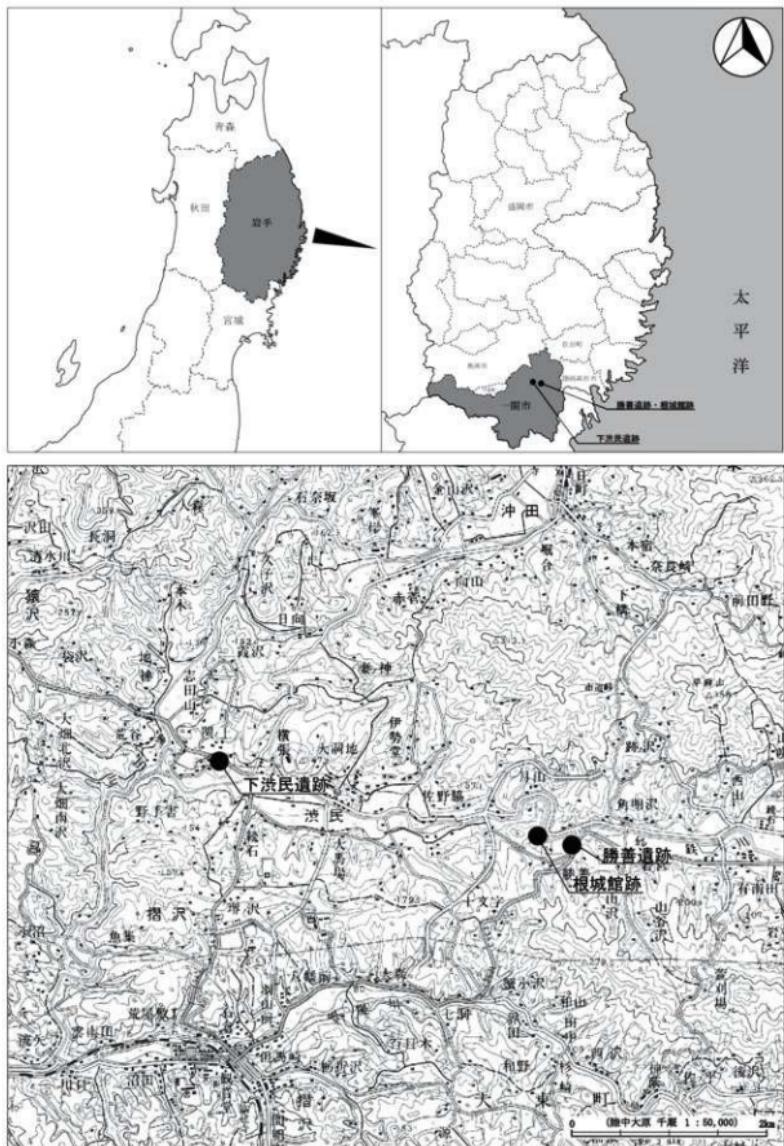
2 地形と地質

一関市は西部に栗駒山をはじめと山並連なる奥羽山脈、東側に独立峰の室根山がそびえる北上山地があり、豊かな自然に囲まれている。市の中央部には東北一大河・北上川が緩やかに流れている。

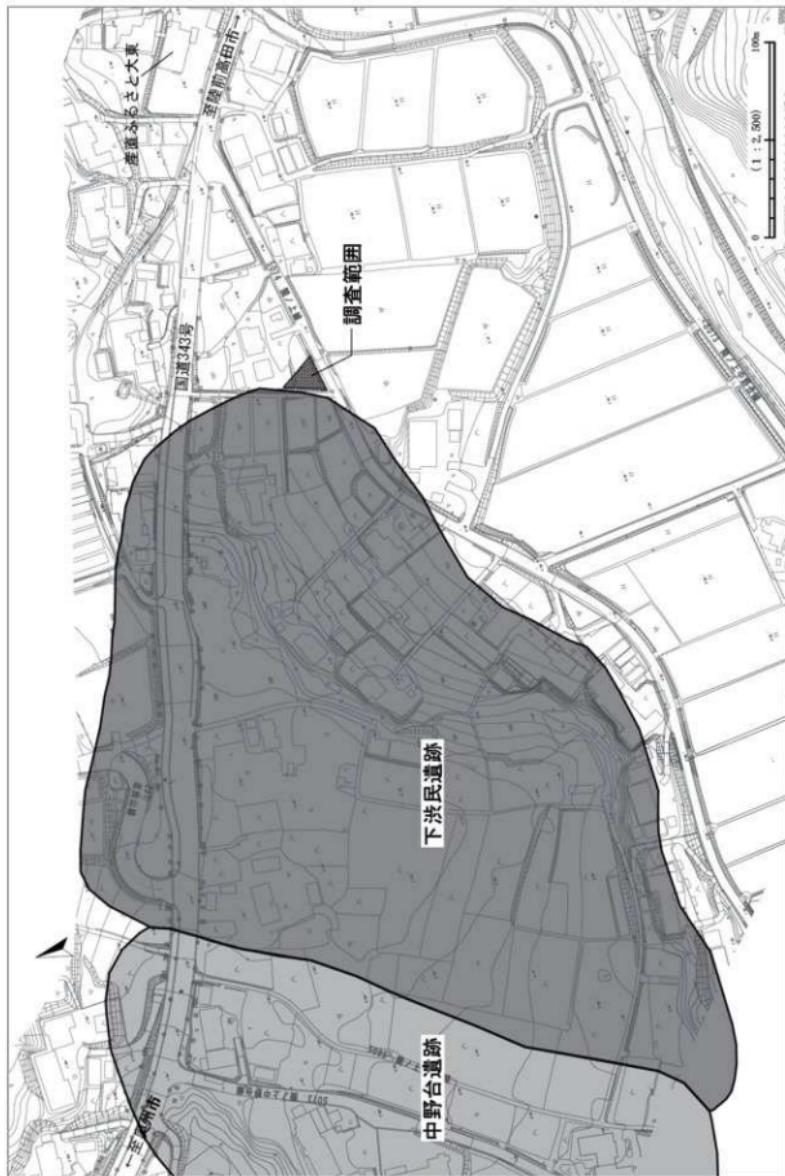
遺跡のある一関大東町は、北上山地の南端部にあり、周囲に室根山（895.4m）、原台山（894.7m）、鷹ノ巣山（792m）、天狗岩山（775m）、大鉢森山（634m）などに囲まれているが、近地の地勢をみると、地形上の起伏に乏しく、200～400mほどの山地や丘陵地と砂鉄川と砂鉄川が西進した所に北部中央から興田川が合流する流域により形成された河岸段丘や谷底平野によって成る。砂鉄川は内野地区最北に位置する鷹ノ巣山を源流とし、渋民、摺沢地区を南下して東山町へと続き、景勝地として知られる観音溪を通り、旧川崎村へと入って北上川と合流する。下渋民遺跡・勝善遺跡・根城館跡はいずれも砂鉄川流域に立地している。

地質は中央部に広がる人首花崗岩体、千獣花崗岩によって、石灰岩、泥岩、礫岩が東西に分かれて連なり、北～西部にはさらに揮綠凝灰岩、蛇紋岩質岩石が一部に形成されている。中央部花崗岩体においては河川の本流・支流に沿って沖積世砂礫岩、洪積世砂礫岩、砂岩が形成されている。

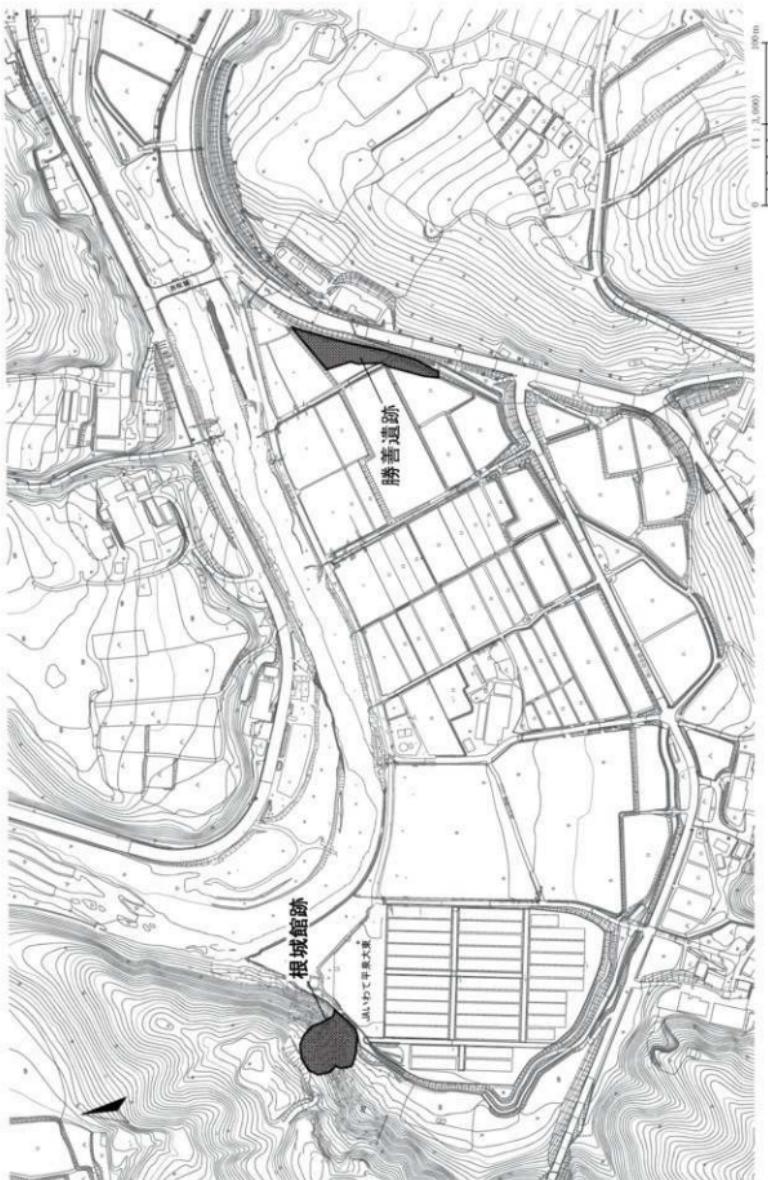
下渋民遺跡・勝善遺跡においては砂鉄川によって形成された砂礫堆積層を地盤とし、勝善遺跡の東側斜面部には崖錐性堆積物が一部確認された。根城館跡は花崗岩質岩石を地盤とした丘陵地の残存部分にある。



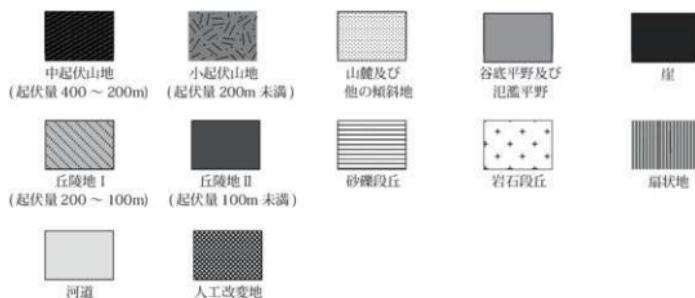
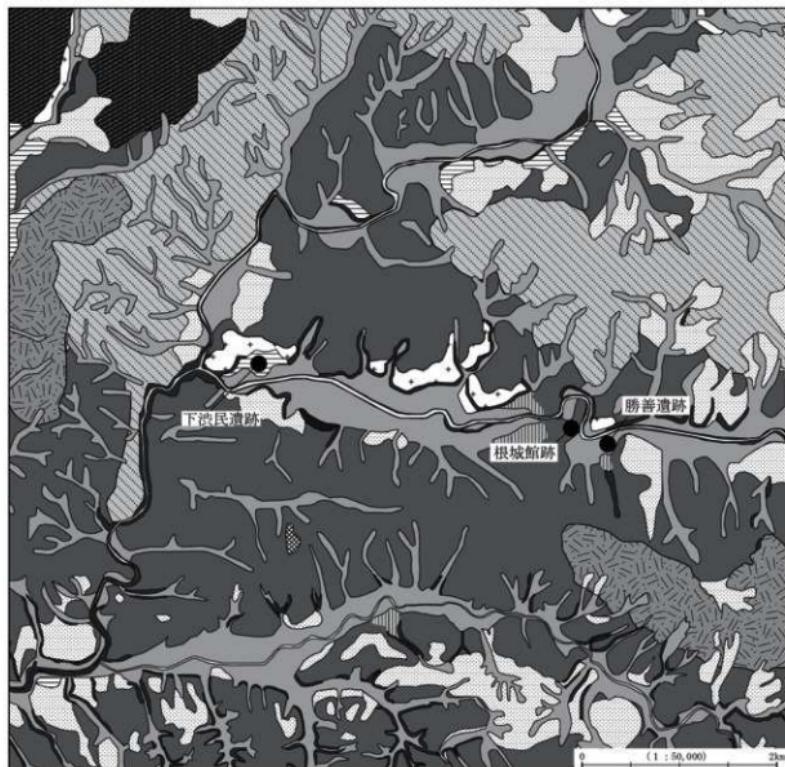
第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺の地形と調査範囲（下流民遺跡）



第3図 遺跡周辺の地形と調査範囲（勝善遺跡・根城館跡）



第4図 地形分類図

3 歴史的環境

(1) 一関市の遺跡

一関市大東町内では、令和元年度現在、岩手県教育委員会が作成した『岩手県遺跡情報検索システム（一関市地方振興局平成30年3月31日現在）』により、915遺跡が登録され、このうち161遺跡が一関市大東町に所在する。

(2) 周辺の遺跡

今回調査した下渋民遺跡・勝善遺跡・根城館跡を中心とし、3遺跡が立地する砂鉄川流域沿いの遺跡を2万5千分の1の縮尺で図幅に収まる38遺跡を掲載した。このうち縄文時代の遺跡は複合遺跡も併せて27遺跡と多数を占め、このうち中野台遺跡、下渋民遺跡、大洞地遺跡、伊勢堂I遺跡、伊勢堂III遺跡、佐野脇I遺跡、佐野脇II遺跡、観音寺遺跡、水無I遺跡で発掘調査が実施されている。このうち最も多く調査が実施されているのが、下渋民遺跡の西側に隣接する中野台遺跡で、1953年に草間俊一氏による学術調査を始めに1995年には大東町教育委員会による調査で縄文時代中期を中心に竪穴住居跡38棟、集石および配石遺構20基、環状列石状遺構1基などが検出された。これらは作業場や祭祀に利用された可能性のある中央の広場を開むように円形ないし、楕円形に配置された集落であると明らかにされた。1999年には「関の上地区雪国生活支援道路環境整備事業」に伴って当埋蔵文化財センターにより、遺跡の北東端付近が調査され、大木8式を主とする縄文時代中期中葉～末葉の遺構・遺物が見つかっている。

今回調査を行った下渋民遺跡は1997年に大東町教育委員会によって砂鉄川に近接する箇所で調査が実施され、中期後葉～後期初頭を主とした遺構・遺物の他、平安時代の竪穴住居跡も1棟見つかっている。

古代の遺跡は複合遺跡の6遺跡と全体に少ない傾向にある。このうち下渋民遺跡～中野台遺跡と広がる砂鉄川右岸の段丘上においては過去の調査で下渋民遺跡（1997年調査）で竪穴住居跡1棟、中野台遺跡（1999年）で住居状遺構1基と土師器片が見つかっており、集落が存在することが考えられる。

大東町の中世城館跡は砂鉄川とその支流である興田川流域に集中しており、根城館をはじめ、室石館、猿沢中館、延貝館、渋民萩館、摺沢萩館、渋民要害、十文字館の8遺跡が今回調査した3遺跡周辺に所在する。いずれも本格的な調査は実施されていない。これ以外では鳥海地区の伊勢館が1982年に大東町教育委員会によって発掘調査が実施されている。調査の結果、掘立柱建物跡56棟、空堀23条、平場23区ほか、柵列や土塁が多く検出された。

参考・引用文献

- 大東町教育委員会 1982『伊勢館遺跡発掘調査報告書』大東町文化財調査報告書第8集
- 大東町教育委員会 1997『中野台遺跡発掘調査報告書』大東町文化財調査報告書第17集

第1表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	備考
1	木本	散布地	調査	調文土器	H10
2	地の神Ⅱ	散布地	調査	調文土器、石器、石製品	H9新規発見
3	地の神Ⅰ	散布地	調査	調文土器	H9新規発見
4	宝石館（天與田館）	城館跡	中世	主郭、脇	
5	猿沢中館（中館・新鹿戸館）	城館跡	中世	土塁、櫓跡	大東町教委1994「應福大東町の城郭」
6	佐谷Ⅱ	散布地	調査、古代	調文土器（前期、中期）・石器・鉄滓	
7	佐谷Ⅰ	散布地	調査	調文土器・フレーク	H9新規、範囲拡大
8	宇賀坂	史跡	中世、近世	土壙、塚（修驗者の塚）？	H9新規発見
9	中野台	散布地	調査	整穴住居・柱立柱建物・集成石・配石・櫛状列石・立石・土壙・廐窓・塗場造構・土壙・柱穴・近世採石、調文土器・土製品、石器・石製品・フレーク・土師器・鉄製品・アスクアルト・植物・動物遺体	S28近大史学研究会開催一色（中期後期等の石敷伊等提出）、H7.7.31～12.27大東町（鳥居整備）、H11奈良文化財センター（国道343号整備）
10	下浜民	散布地	調査、古代	整穴住居建築・整穴状遺構・土壙・塹・配石・土壙・調文土器・土製品・石器・フレーク・土師器・鉄製品・鉄滓・古瓦	H9.8.29～10.9発掘調査（大東町教委、農道整備）
11	延喜館	城館跡	中世		
12	浜井森跡	城館跡	中世	平塁、堆	
13	大洞堆	散布地	調査、古代、近世	整穴状遺構・土壙・塹・廐窓・配石・集成石・調文土器・外生土器・純調文土器・土師器・須恵器・土製品・器口・石器・石器・フレーク・チップ・鉄製品・古鉄	H11.8.23～10.29発掘調査（大東町教委）
14	鶴巣	散布地	調査	調文土器（後期～？）	H13新規
15	大西塙	生産遺跡	調査、古代	調文土器・須恵器（BC）	H14新規
16	清六薪窯	城館跡	中世	塙、平塁、堆跡	
17	小林				
18	伊勢堂Ⅰ	散布地	調査	整穴状住居・整穴状遺構・柱立柱建物・柱穴列・土壙・塹・調文土器・石器・土製品・土師器・須恵器・土製品・器口・脚踏・鐵質	H17.4.18～8.19発掘調査（大東町教委）
19	伊勢堂Ⅱ	散布地	調査、古代	塗場造構・堆上・整穴状住居・塙・耕作跡足跡・土壙・廐窓・柱立柱建物・陷穴・柱列・柱穴・調文土器・鉄滓・器口・土師器・須恵器・土製品・石器・石製品・鐵製品・鐵質	H14新規、H18.5.9～9.29、H19.4.9～4.27発掘調査
20	伊勢堂Ⅲ	散布地	調査	調文土器・石器・フレーク	H13新規
21	佐野塙Ⅰ	範囲落	調査、中世	土壙、土坑、調文土器・石製品・土師器	H14範囲拡大、H20.4.15～4.23発掘調査
22	浜民豪著	城館跡	中世	塙、平塁	H13新規
23	佐野塙Ⅱ	散布地	調査～中世・近世	整穴状遺構・土坎列・柱立柱建物・塙・柱列・調文土器・石器・土師器・須恵器・土製品・鐵製品・鐵質	H19.5.1～6.29発掘調査。H10新規登録
24	藏音寺	散布地	調査～平安	整穴状遺構・土壙・塹・石列・石圓形・調文土器（早期・前期・後期）・石器・土師器・須恵器・鉄製品・フレーク・古鉄	H19.7.2～8.31発掘調査。H30新規登録
25	水無Ⅰ	散布地	調査	整穴状遺構・整穴住居・土壙・廐窓・土壙・土塁・廐窓・集成石・柱立柱建物・柱穴列・調文土器・石器・土製品・土師器・須恵器・陶器・鐵滓・新製品・フレーク・古鉄	H15.5.6～9.26発掘調査（大東町教委）、道路に半蔵
26	水無Ⅱ	散布地	調査	調文土器（後期）	道路に半蔵
27	和田沢	散布地	調査	調文土器・石器	
28	月山Ⅲ	散布地	調査	調文土器（後・晚）	道路工事により一部破壊
29	根城館	城館跡	中世	空塙、馬場跡、平塁、土壙、二の郭、三の郭	
30	勝西				
31	十文字館	城館跡	中世		
32	月山Ⅰ	散布地	調査	調文土器	
33	月山Ⅱ	散布地	調査	調文土器（後・晚）	
34	綿の沢Ⅴ	散布地	調査	調文土器	
35	綿の沢Ⅳ	散布地	調査	調文土器	
36	綿の沢Ⅲ	散布地	調査	調文土器	
37	綿の沢Ⅳ	散布地	調査	調文土器・フレーク	H12系整備事業の試験あり
38	市道	散布地	調査	調文土器	



第5図 周辺の遺跡分布図

III 野外調査と室内整理

1 野外調査

(1) 野外調査の経緯と経過

- 7月1日 下渋民遺跡調査開始。
7月2日 下渋民遺跡、人力による試掘を行った。
7月3日 下渋民遺跡、重機による表土除去を行った。
7月5日 下渋民遺跡、遺構検出・精査作業を開始した。
7月9日 下渋民遺跡、終了確認を実施した。
　　× 勝善遺跡重機による表土除去を開始した。
7月11日 下渋民遺跡、航空写真撮影を実施した。
7月12日 下渋民遺跡調査終了。
7月17日 勝善遺跡、遺構検出を開始した。
8月2日 勝善遺跡、遺構精査を開始した。
8月19日 勝善遺跡、航空写真撮影を実施した。
8月27日 勝善遺跡終了確認を実施した。
8月29日 勝善遺跡調査終了。
9月2日 根城館跡調査開始。
9月3日 根城館跡、雑物撤去を行い、順次トレンチによる掘削を開始した。
9月20日 根城館跡、航空写真撮影を実施した。
9月25日 根城館跡終了確認。
9月26日 根城館跡調査終了。撤収作業。

(*協議・終了確認はいずれも委託者・岩手県教育委員会・埋文センターの3者による)

(2) グリッドの設定

勝善遺跡・根城館跡の調査にあたっては平面直角座標第X系にあわせ、調査区全体をカバーするよう北西端に原点とし、これを始点として $100 \times 100\text{m}$ の大グリッドを設定し、これを20等分し、 $5 \times 5\text{ m}$ の小グリッドとした。大グリッドの呼称は原点を起点に南方向に I, II, III... とローマ数字をあて、西から東方向へは A, B, C... とアルファベット大文字をあてて設定した。小グリッドの呼称は北から南方向へ 1 ~ 25 のアラビア数字、西から東方向へ a ~ y のアルファベット小文字をあて、これらの組み合わせで小グリッドを表し「I A 1 a」のように呼称した。下渋民遺跡は調査区が狭かつたため、大グリッドは使用せず、 $4 \times 4\text{ m}$ の小グリッドのみの使用とした。なお、各遺跡の調査原点は下渋民遺跡 ($X = -108412.000$, $Y = 42612.000$)、勝善遺跡 ($X = -109180.000$, $Y = 46324.000$)、根城館跡 ($X = -109156.000$, $Y = 45880.000$) である。

(3) 基準点の設定

遺構の実測に利用するため、調査区内外に3級基準点および補助点の打設を委託し、これをもとに調査を行った。座標値は世界測地系によるもので、成果値は以下のとおりである。

<下浜民遺跡>

基準点1 X=-108453.484	Y=42605.921	H=90.381m	補助点2 X=-108438.708	Y=42634.127	H=90.695m
基準点2 X=-108503.834	Y=42622.797	H=91.073m	補助点3 X=-108426.069	Y=42625.212	H=90.918m
補助点1 X=-108450.778	Y=42618.102	H=90.420m	補助点4 X=-108434.353	Y=42612.803	H=90.977m

<勝善遺跡>

基準点1 X=-109206.430	Y=46364.104	H=120.639m	補助点2 X=-109275.929	Y=46337.478	H=121.900m
基準点2 X=-109221.244	Y=46357.550	H=120.606m	補助点3 X=-109175.783	Y=46351.756	H=120.491m
補助点1 X=-109257.924	Y=46345.435	H=120.642m	補助点4 X=-109340.216	Y=46311.752	H=129.046m

<根城館跡>

基準点1 X=-109173.552	Y=45885.156	H=139.378m	補助点2 X=-109193.033	Y=45881.196	H=126.889m
基準点2 X=-109168.905	Y=45913.186	H=136.435m	補助点3 X=-109198.057	Y=45889.223	H=121.845m
補助点1 X=-109166.318	Y=45898.416	H=139.262m	補助点4 X=-109195.531	Y=45909.775	H=119.294m

(4) 調査方法と記録

遺跡の調査に先立って、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課による事前の試掘調査が実施されている。この試掘により調査対象区内の堆積状況や遺構検出レベルがおおよそ把握されていたため、それを踏まえた上で、下浜民遺跡・勝善遺跡は重機による表土除去を実施し、その後は人力による遺構検出を行った。根城館跡は雑物撤去後、現況の記録写真・地形測量を行い、その後トレンチによる遺構の確認の順で作業を進めた。

下浜民遺跡・勝善遺跡で検出された遺構は以下の手順で調査を進めた。炉跡は4分法、土坑は2分法で精査を行い、溝は適宜に土層確認用の断面観察ベルトを残し、埋土の堆積状況の確認を行いながら掘り下げた。柱穴状土坑については検出時に柱痕を確認し、平面図作成（株式会社CUBICの遺構実測支援システムによる）後、セクションベルトを設け、断面→完掘の順で写真撮影と図面作成作業を行った。

調査記録用にデジタル一眼レフカメラ(Canon EOS 6D)の1台、中判AF一眼レフカメラ(Mamiya 645AFDⅢ)1台を使用した。撮影にあたって、整理時の混乱を防ぐため撮影内容を記入した撮影カードを対象遺構撮影前に撮影している。その他、調査終了時に併せてラジコンヘリによる航空写真撮影を実施した。

2 室内整理の手順と方法

(1) 作業経過

各遺跡の室内整理期間は前述の例言のとおりで、整理作業は遺物の接合・復原・実測図作成・図面合成・原稿執筆・各種観察表の作成等の作業を実施した。

(2) 遺物の整理

洗浄した遺物は注記作業→重量計測→接合・復原の順に作業を行い、その過程で本書に掲載する遺物を抽出し、それらの実測図を作成し、トレースを行った。

(3) 掲載図

遺物実測図の掲載縮尺は土器・礫石器・陶磁器1/3、土製品・石製品・剥片石器1/2を原則とするが、土器・礫石器は大きさに応じて1/3～1/4とした。遺構図面は、野外調査で作成した実測原図を点検の上で第二原図（修正済図）を作成した。掲載した図の縮尺は、規模により異なるものもあることから各図版毎にスケールを付した。

(4) 写真の整理

掲載している遺物写真は、当センター写真技師によりデジタルカメラで撮影した。撮影はRAWモードで撮影し、印刷段階でJPEGに変換している。

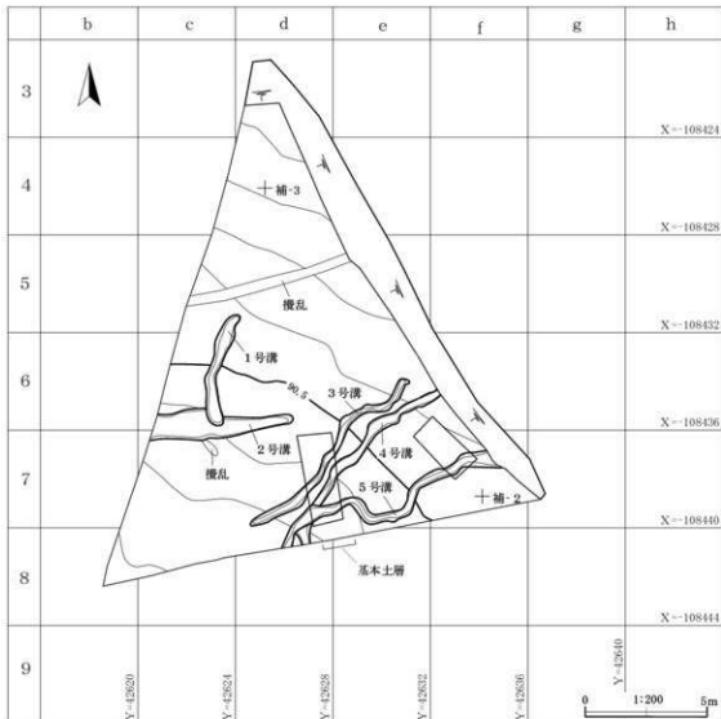
IV 下渋民遺跡

1 遺跡の立地

遺跡は一関市大東町渋民字関ノ上36番地2地先ほかに所在し、砂鉄川の右岸の段丘上に立地する。標高は約90m前後で調査前の現況は畠地および宅地である。

2 調査の概要

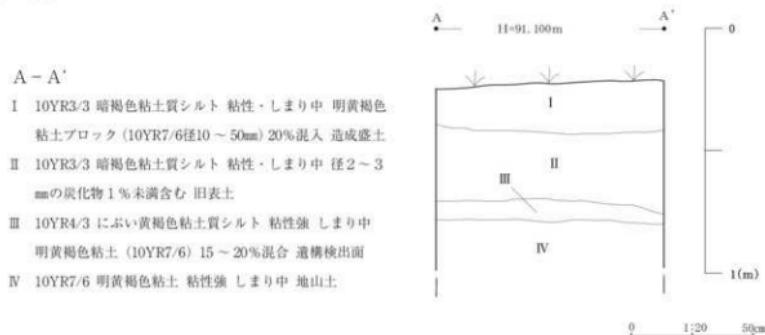
調査対象面積は123m²で平成9年に一関市教育委員会（旧大東町教育委員会）で調査が実施され、縄文時代～古代の遺構・遺物が多く見つかった箇所から400mほど北東側に位置する。検出遺構は溝5条のみで、出土遺物は縄文土器、土師器、石鏃、剥片石器、陶磁器である。



第6図 遺構配置図

3 基本層序

地形は北東側が高く、南西側に向かって低くなる斜面地で、堆積状況の良い調査区南側の8d・8eグリッドに跨る壁面に土層観察のためのトレンチを設置し、記録した。I層は表土および造成による盛土、II層が旧表土構検出面で、III層のにぶい黄褐色粘土質シルト面以下が遺構検出面である。IV層は調査区南西側の低位面にのみ確認することができ、IV層中に土師器を主とした遺物が含まれている。



第7図 基本土層

4 検出遺構

今回の調査では遺構は溝5条を検出した。遺構の名称は属性の変更や欠番(不掲載)になる可能性があったため、調査時はSD1～SD5の略号を使用し、整理段階で1～5号溝の名称に変更した。

1号溝（第9図、写真図版3）

調査区西側の5c・6cグリッドに跨がって位置し、表土除去後にIV層で検出した。北から南に向かってやや「く」字状であるが、おおよそ直線的に延びる。2号溝と重複するが、新旧関係は判然としない（不明）。規模は全長4.76m、上端幅35～65cm、下端幅16～47cm、検出面から底面までは最も深い箇所でも10cm以下と浅い。遺物は石器が少量出土したが、周辺からの混入と考えられる。時期は不明である。

2号溝（第9図、写真図版3）

調査区西側の6c他複数グリッドに跨がって位置し、表土除去後にIV層で検出した。東西方向に直線的に延び、西側が調査区外へと続いている。1号溝と重複するが、新旧関係は不明である。規模は全長5.72m、上端幅42～124cm、下端幅36～106cm、検出面から底面までは最も深い箇所でも8cm以下と浅い。遺物は土師器、石器が少量出土したが、周辺からの混入と考えられる。時期は不明である。

3号溝（第10図、写真図版3）

調査区西側の6e他複数グリッドに跨がって位置し、表土除去後にIV層で検出した。北東-南西方向に蛇行して延びる。規模は全長9.21m、上端幅23～48cm、下端幅8～23cm、検出面から底面までは最も深い箇所で20cmを測る。遺物は縄文土器、土師器が少量出土したが、周辺からの混入と考えられる。時期は不明である。

4号溝（第10図、写真図版3）

調査区西側の6e他複数グリッドに跨がって位置し、表土除去後にIV層で検出した。北東-南西方向に蛇行して延び、両端が調査区外へと続く。5号溝と重複し、これを切る。規模は全長約8.82m、上端幅23～53cm、下端幅6～38cm、検出面から底面までは最も深い箇所で14cmを測る。遺物は縄文土器、土師器が少量出土したが、周辺からの混入と考えられる。時期は不明である。

5号溝（第10図、写真図版3）

調査区東側の7f他複数グリッドに跨がって位置し、表土除去後にIV層で検出した。北東-南西方向に蛇行して延び、両端が調査区外へと続く。4号溝と重複し、これに切られる。規模は全長10.59m、上端幅25～65cm、下端幅7～42cm、検出面から底面までは最も深い箇所で22cmを測る。遺物は土師器、石器が少量出土したが、周辺からの混入と考えられる。時期は不明である。

5 出 土 遺 物

縄文土器688g、土師器6113g、須恵器30g、石器52.3g、陶磁器6.6gが出土した。このうち3点を図化・掲載した。1は土師器壺の口縁～胴部破片である。胴部外面にケズリが施され、炭化物が付着している。2は石錐で基部は有茎で石材には頁岩が使用されている。3は肥前産の磁器皿の破片である。

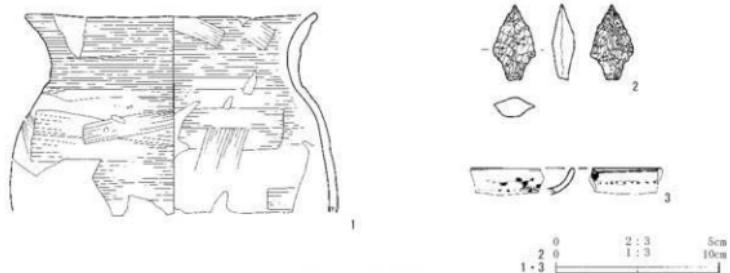
6 ま と め

今回の調査区は縄文・古代・近世の遺物散布地であることが明らかになった。縄文時代については本遺跡の西側に隣接する縄文時代中期の集落遺跡である中野台遺跡や平成9年度に一関市教育委員会（旧大東町教育委員会）が調査し、縄文時代中～後期の集落跡が見つかった下渋民遺跡の調査区からは離れた場所にあるため、これらとの関連性は不明であるが、古代については遺物の出土状況から今回の調査区周辺にも集落が存在する可能性が考えられる。

<引用・参考文献>

大東町教育委員会 1998『下渋民遺跡発掘調査報告書』大東町文化財調査報告書第19集

2001『中野台遺跡発掘調査報告書』岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財調査報告書第354集



第8図 出土遺物

第2表 土器観察表

No.	出土地点・層位	種類	器種	部位	断面調整等			計測値(cm)	図版	写真
					外面	内面	底面外側			
1	5号溝 検出面	土師器	甕	口縁～胴部	ケズリ→ナゲ	ナゲ	—	17.9 (12.2)	—	8 13

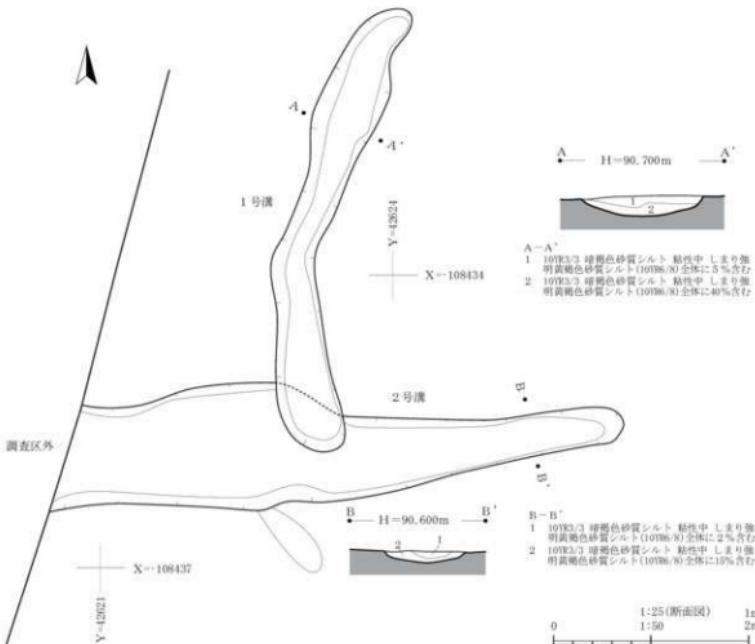
※<>は残存値

第3表 石器観察表

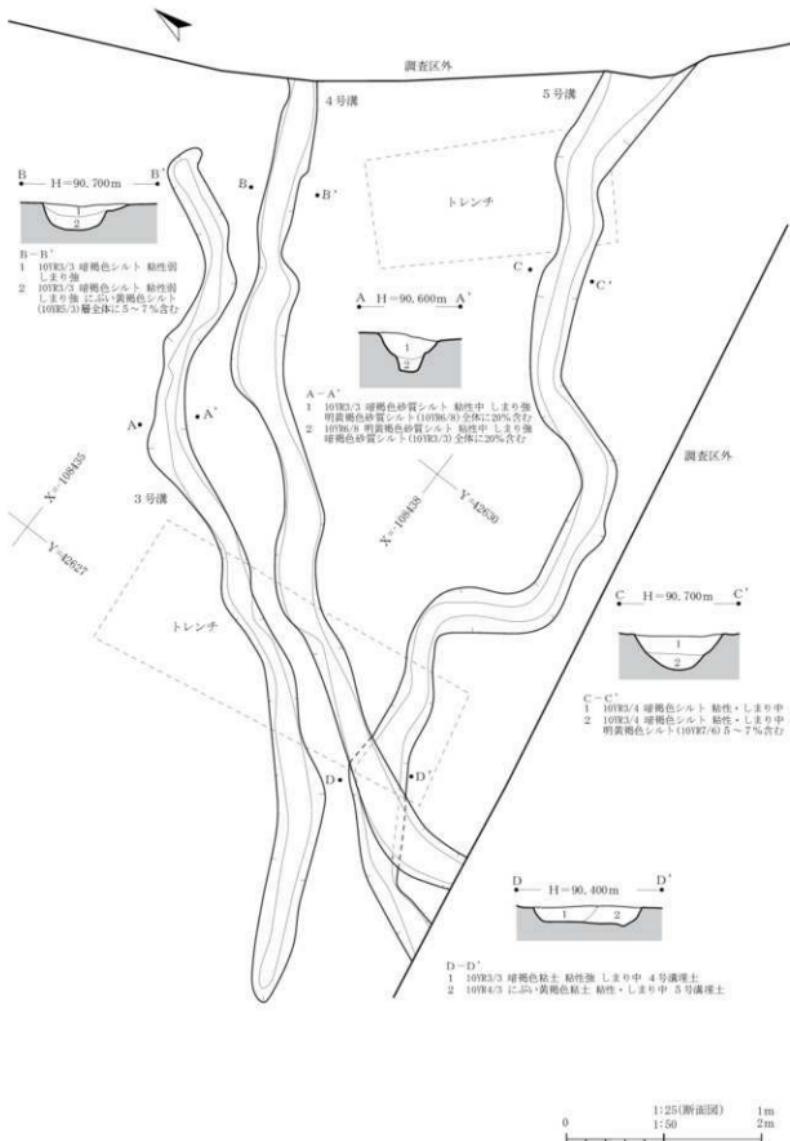
No.	出土地点・層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重積(g)	石質	備考	図版	写真
2	2号溝 底面	石器	2.3	1.3	1.1	1.3	石英	中生代 北上山地	有茎	8 13

第4表 陶磁器観察表

No.	出土地点・層位	種類	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	重量(g)	産地	備考	図版	写真
2	7 d トレンチ内	細器	皿	口縁部	—	—	—	6.6	肥前	外面：唐草文	8	13



第9図 1・2号溝



第10図 3~5号溝

V 勝 善 遺 跡

1 遺 跡 の 立 地

遺跡は一関市大東町大原字勝勝52番地1地先に所在し、東日本旅客鉄道大船渡線相澤駅から北東方向に約4.5kmに位置し、砂鉄川左岸の河岸段丘上に立地する。標高は約120m前後で、調査前の現況は水田である。

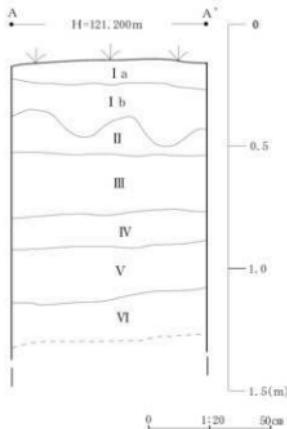
2 調 査 の 概 要

調査対象面積は1,001m²で、このうち調査区を横断する水路のある箇所より南側の238m²については重機による表土除去の段階で旧河道と判明し、掘削深度が2mを超え、さらに湧水による壁面の崩落の可能性があることから岩手県教育委員会生涯学習文化財課の立ち会いの下、トレーナーによる確認を行い埋め戻すことになった。

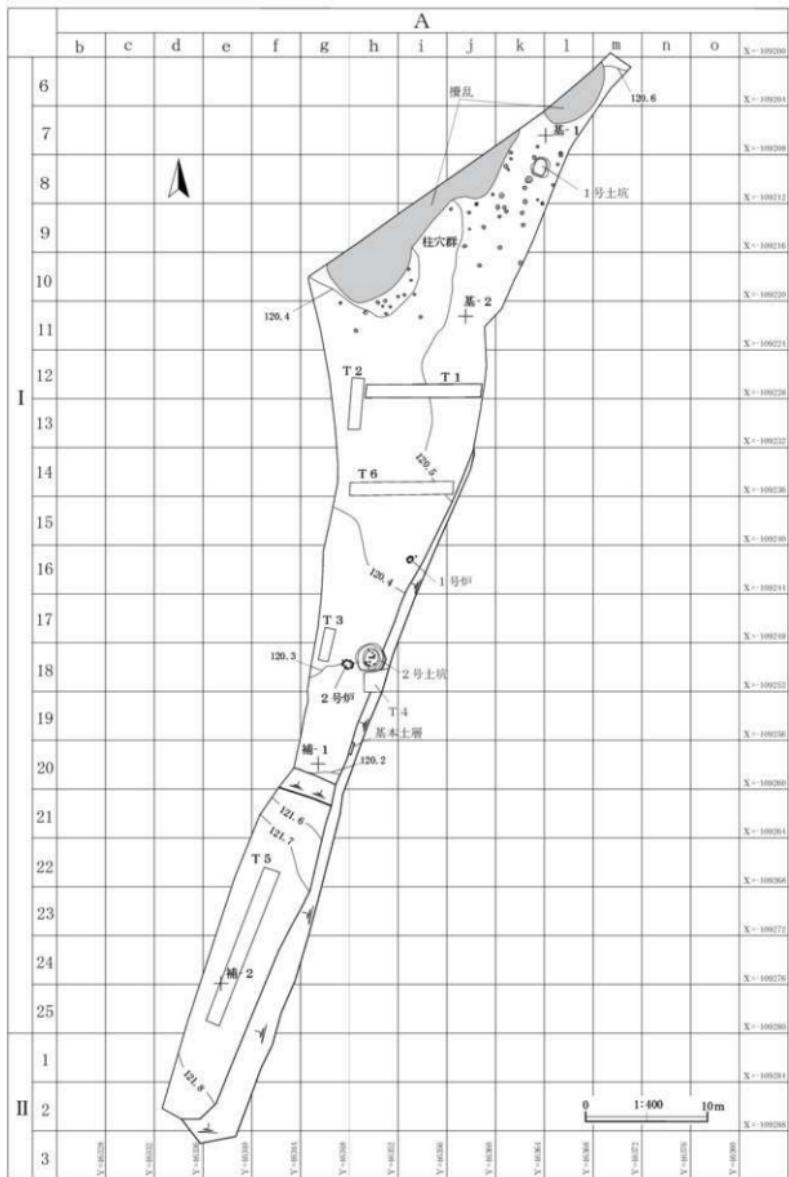
3 基 本 層 序

調査区の現況地形は東側の一部が国道343号から続く法面で斜面となっているが、他は水田利用のため平坦な地形を成している。IA 19gグリッドの調査区東側壁面に土層観察のためのトレーナーを設置し、記録した。I層は表土および崖錐性の堆積層と旧水田耕作土、II層以下が自然堆積層でIII層黒色シルト層は繩文時代晚期の遺物包含層である。IV層以下からは遺物は出土していない。

- A-A'
- I a 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり中
I b 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 粘性なし しまり中
II 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性・しまり中
砂10~15%混じる
III 10YR2/1 黒色シルト 粘性強 しまり中 遺物含む
IV 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 粘性・しまり中
黒褐色シルト (10YR3/1) 10%混じる
V 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり中 褐色砂
質シルト (10YR4/4) 20%混じる
VI 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性弱 しまり中



第11図 基本土層



第12図 遺構配置図

4 検出遺構

今回の調査では縄文時代晚期の炉2基、時期不明の土坑2基、柱穴状土坑45個を検出した。遺構の名称は属性の変更や欠番(不掲載)になる可能性があったため、調査時は炉をS L、土坑をS Kの略号を使用し、整理段階でS L 1→1号炉、S L 2→2号炉、S K 1→1号土坑、S K 2→2号土坑へと名称を変更した。なお、柱穴状土坑は調査時・整理段階ともに名称はPを使用した。

(1) 炉跡

石組によつて囲まれている石開炉で、調査区中央東側の遺物包含層の掘り下げ作業中に2基検出した。本来は竪穴建物に伴つて使用されていた可能性があるが、後世の造成工事による削平などにより、他の遺構との関係性が不明であったものを単独の遺構として調査・掲載した。時期は遺物包含層と同じ縄文時代中葉でいざれも焼成痕跡は確認できなかつた。

1号炉（第13図、写真図版6）

＜位置・検出状況・重複関係＞ 調査区中央のIA16iグリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。重複する遺構はない。

＜平面形・規模＞ 長さ約11～18cmの自然礫9個を使用して石組みを構成している。炉石は楕円形状のやや不整な形状に配置され、一部の礫は失われている。軸方向はN-52°-Eで規模は長軸方向52cm、短軸方向42cmを測る。石の抜き取り痕(掘方痕跡)は、認められなかつた。

＜焼成面＞ 焼成面と想定される石組の内面および遺構周辺に焼成痕や炭化物は見つからなかつた。また、炉の構成礫に被熱の痕跡も認められなかつた。

＜遺物＞ 遺構および周辺から石器・石製品各1点が出土した。24は炉の構成礫に使用されていた磨石類で片面に磨痕が認められる。29は1号炉の北東で検出した独鉛状石器で石材にはいざれもホルンフェルスが使用されている。

＜時期＞ 遺構内および周辺から出土した土器から縄文時代晚期中葉頃と推測される。

2号炉（第13・14図、写真図版6・7）

＜位置・検出状況・重複関係＞ 調査区西側のIA18g・18hグリッドに跨がって位置し、Ⅲ層で検出した。重複する遺構はない。

＜平面形・規模＞ 長さ約14～19cmの自然礫10個を使用して石組を構成している。炉石は楕円-台形状のやや不整な形状に配置され、一部の礫は失われている。軸方向はN-68°-Eで規模は長軸方向92cm、短軸方向76cmを測る。炉石の抜き取り痕(掘方痕跡)は認められなかつた。

＜焼成面＞ 焼成面と想定される石組の内面および遺構周辺に焼成痕や炭化物は見つからなかつた。また、炉の構成礫に被熱の痕跡も認められなかつた。

＜遺物＞ 土器は縄文土器108.4gが出土したが、小片のため図化・掲載には至らなかつた。石器は石皿類の再利用と考えられる炉石1点が出土した。16は角柱状の形状を呈し、各所に磨り痕が認められる。石材にはヒン岩が使用されている。

＜時期＞ 遺構内から出土した土器から縄文時代晚期中葉頃と推測される。

(2) 土坑

調査区全体で2基検出した。時期はいずれも不明である。

1号土坑 (第14図、写真図版7)

＜位置・検出状況・重複関係＞ 調査区北側のIA8k・8lグリッドに跨がって位置し、VI層で検出された。重複する遺構はない。

＜平面形・規模＞ 形状は開口部が壁面崩落の影響でやや歪であるが、壁面および底面の形状から橢円形を呈すると考えられる。規模は開口部径162×147cm、底部径132×98cm、検出面から底面までの深さは63cmを測る。

＜堆積土＞ 埋土は自然堆積で、上～中位は壁際に褐色砂混じりの崩落土が一部に見られるが、黒褐色シルトを主体とする。下位には上位より明るい色調の黒褐色砂質シルト層があり、底面に黒色粘土質シルトが堆積する。

＜壁・底面＞ 壁面は底面～中位までは垂直気味に立ち上がり、そこから開口部までは崩落の影響で外反している。底面はほぼ平坦である。

＜遺物＞ 繩文土器片22gが埋土から出土したが小片のため図化・掲載はできなかった。

＜時期＞ 時期を特定しうる遺物がないことから詳細は不明である。

2号土坑 (第14図、写真図版7)

＜位置・検出状況・重複関係＞ 調査区中央のIA18hグリッドに位置し、III層で検出された。重複する遺構はない。

＜平面形・規模＞ 形状は開口部が円形、底部が橢円形で掘り鉢状に底面中央に向かって狭くなっている。規模は開口部径236×228cm、底部径140×107cm、検出面から底面までの深さは中央付近で42cmを測る。

＜堆積土＞ 埋土は自然堆積で、上～中位は小礫混じりの黒色シルト、下位は黒褐色シルトで長さ10～25cmの礫を多く含む。底面の壁際に褐色砂混じりの黒色シルトが堆積している。

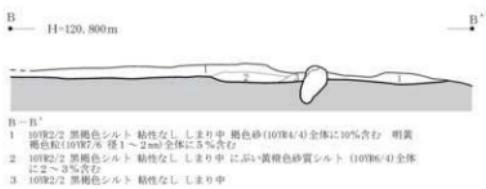
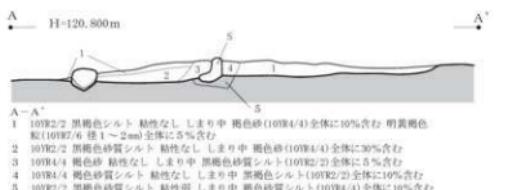
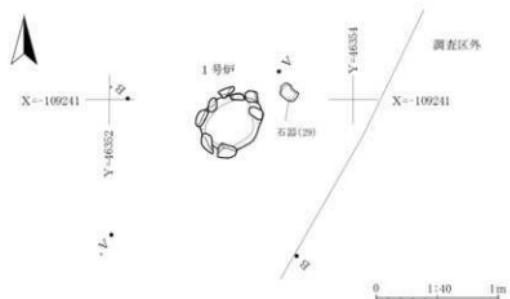
＜壁・底面＞ 断面形状は緩いU字状で底面中央部分が最も深く、開口部に向かって内湾気味に壁が立ち上がっている。

＜遺物＞ 繩文土器片308.5gが埋土から出土したが、小片のため図化・掲載はできなかった。他には埋土中位～底面で礫が大量出土しているが、いずれも自然礫である。

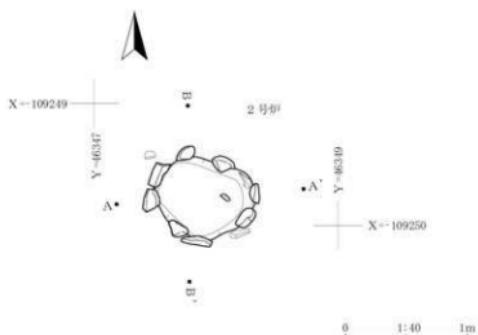
＜時期＞ 時期を特定しうる遺物がないことから詳細は不明であるが、検出状況や埋土から縄文時代晩期よりは新しい時期に属すると推測される。

(3) 柱穴状土坑 (第15図、写真図版8)

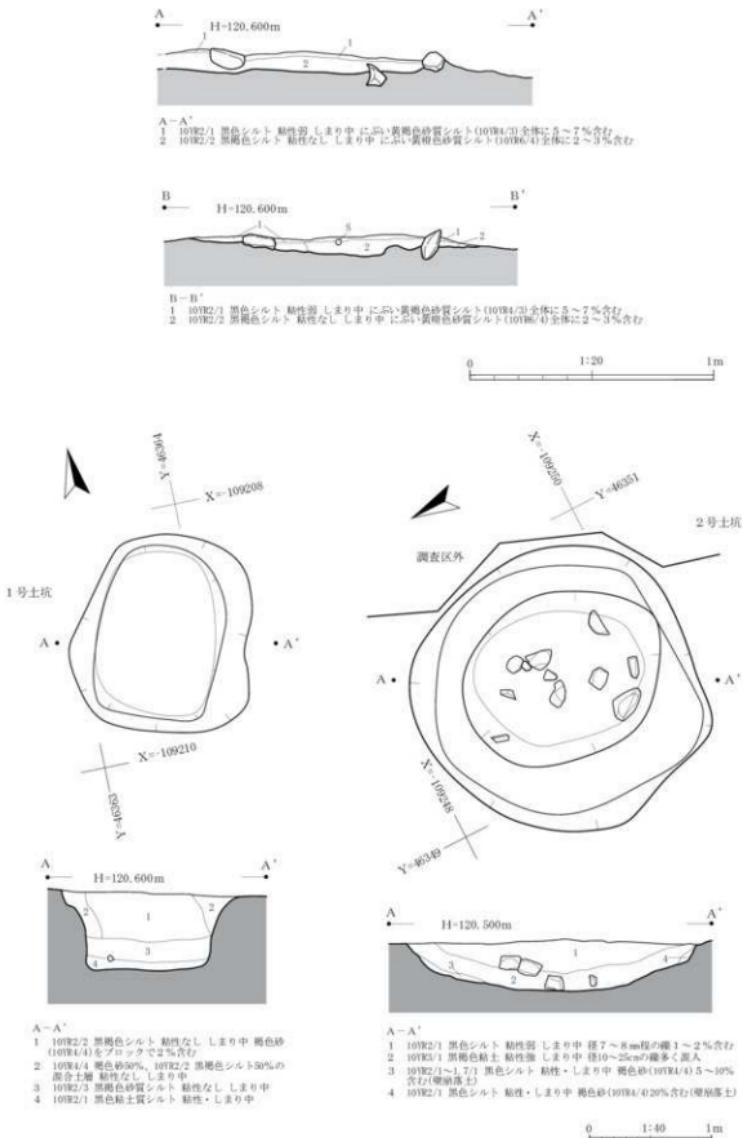
調査区北側で45個検出した。検出面は表土除去後のVI層である。規模は開口部径15～54cmで、配列に規則性はみられない。各柱穴の規模は第15図中の表のとおりである。遺構の埋土から縄文土器片が出土するものもあるが、周辺からの混入と考えられ、柱穴群の時期の詳細については不明であるが、検出状況から近世以降と推測される。



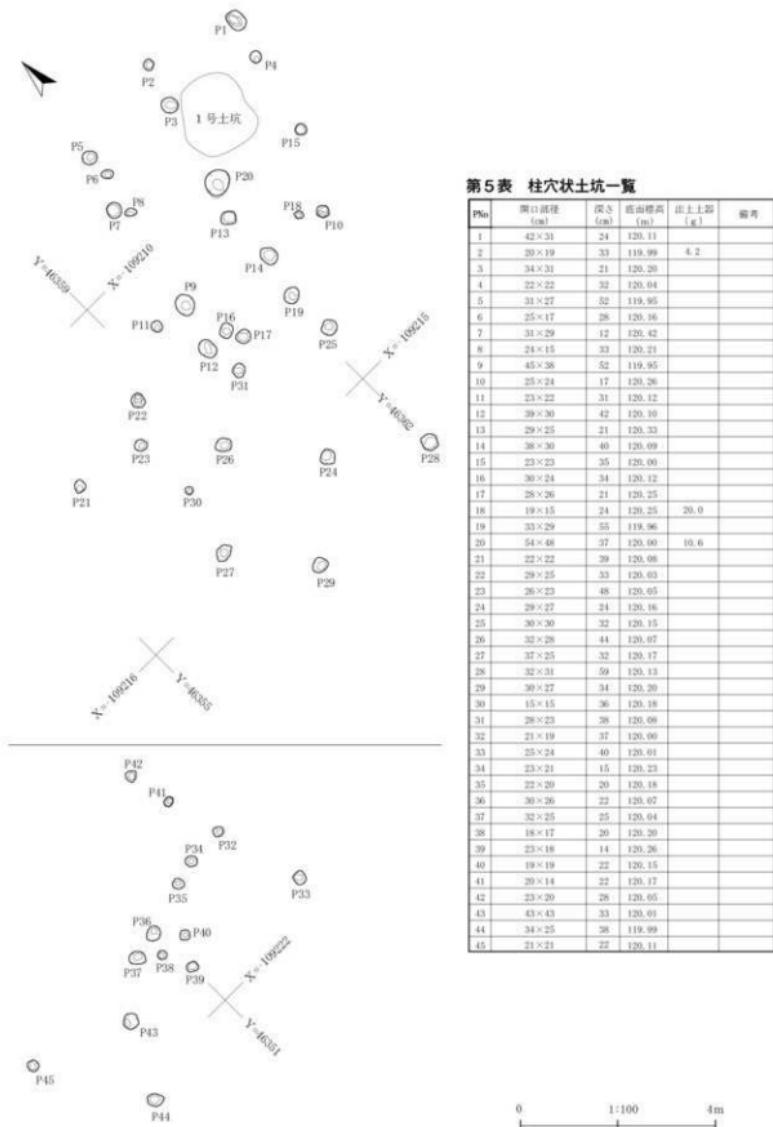
0 1:20 1m



第13図 1・2号炉



第14図 2号炉、1・2号土坑



第15図 柱穴状土坑 (P1 ~ 45)

5 出 土 遺 物

出土した遺物は土器34607.2g、石器・石製品38791.8g、土製品66.6g、陶磁器25.1gである。このうち49点を図化・掲載した。

(1) 土 器 (第16～18図、写真図版13・14)

15点を図化・掲載した。器種は鉢類12点、壺1点、注口土器2点である。1～9は深鉢で1・2は2号炉、他は遺構外から出土した。いずれも口縁～体部の破片である。10～12は鉢で11は口縁部頂部に2個一対の突起を有する。12は小形の鉢で一部が欠損するため、口縁部と底部破片のみの出土であるが同一個体と考えられる。13は壺、14・15は注口土器の一部破片である。

(2) 石 器 (第18～21図、写真図版14～16)

石皿・台石類8点、磨石類4点、石錐1点が出土した。17～23は石皿で幅広の磨面を有し、縁や脚はない。16は2号炉の構成礎に転用されたもので、中央が窪んだ形状を呈するものであったと推測される。また21・22は周縁の一部に成形の際の剥離痕が残っている。24～27は磨石類としたが、24～26が扁平な磨面を有するのに対し、27の断面形状は梢円状で扁平な面はない。28は石錐で摘込み部の一部が欠損する。石材には頁岩が使用されている。

(3) 石 製 品 (第22・23図、写真図版16・17)

独鉛状石器1点、円盤状石製品9点、石棒類6点が出土した。29は独鉛状石器で中央部に抉りを有し、敲打痕が認められる。両端部は剥離後、片側のみ研磨が施されている。30～35はいずれも破片のため全体の形状は不明であるが、断面形状から30～34は石刀、35は石棒と推測される。36～44は円盤状石製品で周縁を打ち欠いた痕跡が確認でき、36～41の平面形状は五角形を呈する。

(4) 土 製 品 (第24図、写真図版17)

土偶1点、円盤状土製品2点、ミニチュア土器1点が出土した。45は土偶の一部（左腕？）と考えられる破片で胎土に砂粒が多く含まれ、外面の一部が剥落により欠損しているが、残存部分に文様などの装飾はない。46・47は円盤状土製品で土器片の周縁を打ち欠いて多角形状に成形した痕跡が確認できる。表面に文様はない。48は鉢形土器のミニチュアで口縁～体部の大半が欠損し、残存しているのは底部と体部下の一部である。表面に文様はない。

(5) 陶 磁 器 (第24図、写真図版17)

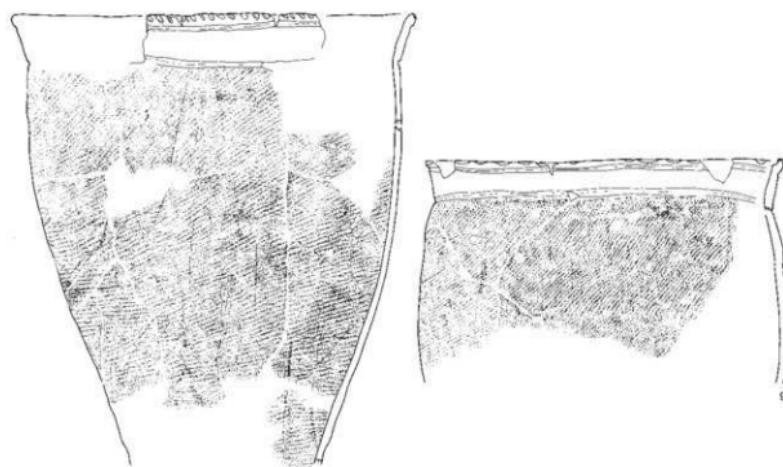
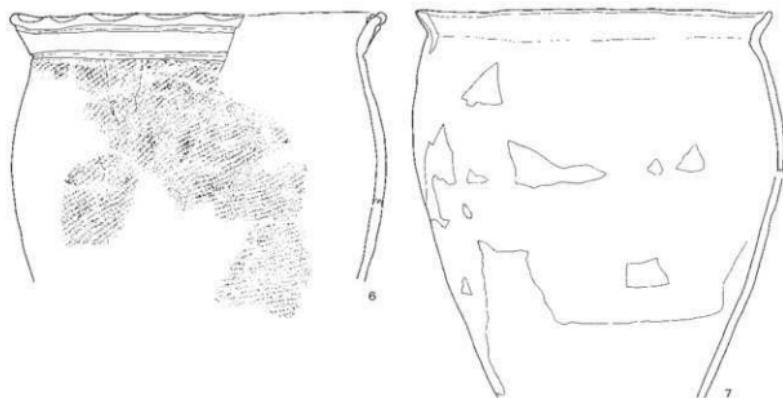
I A 12g グリッドのトレンチ内から肥前産と考えられる磁器碗の底部破片が1点出土した(49)。

6 ま と め

調査の結果、縄文時代晩期中葉の集落の一部であることが確認された。調査成果および地形を勘案すると集落（居住空間）の主体は調査区東側の斜面部に存在すると推測される。

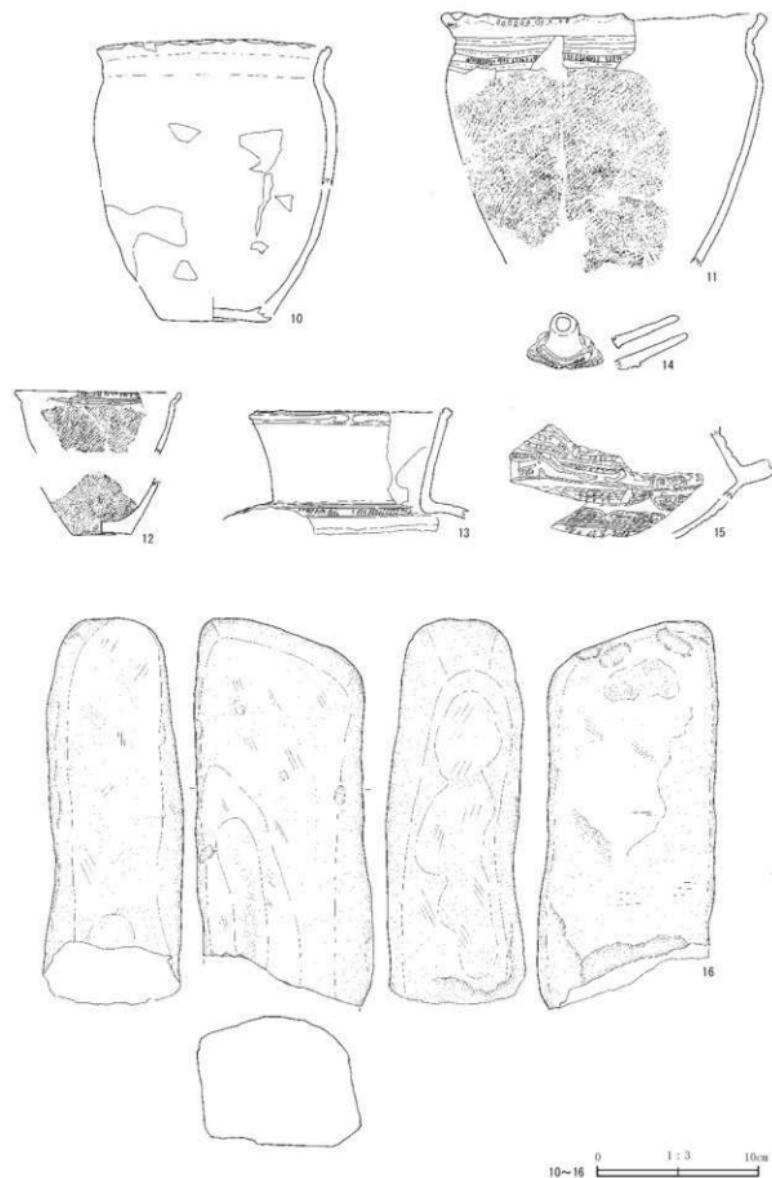


第16図　出土遺物1（土器1）

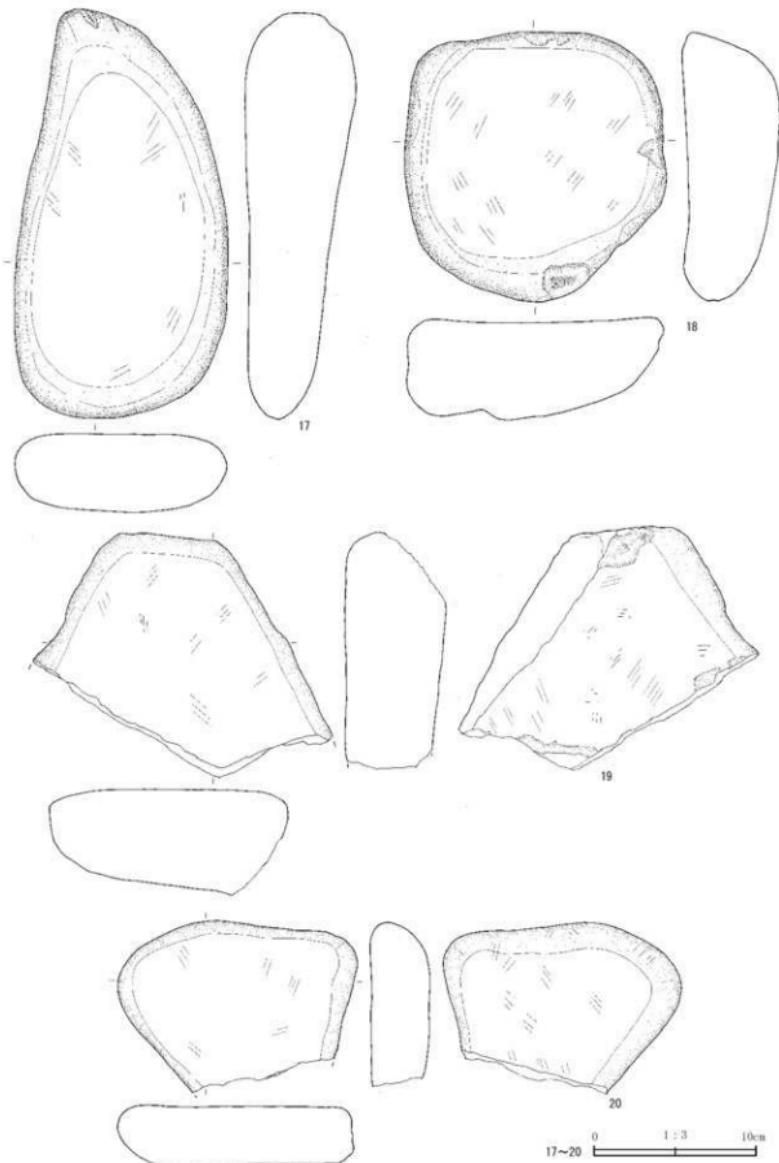


7~9 0 1:4 10cm
6 0 1:3 10cm

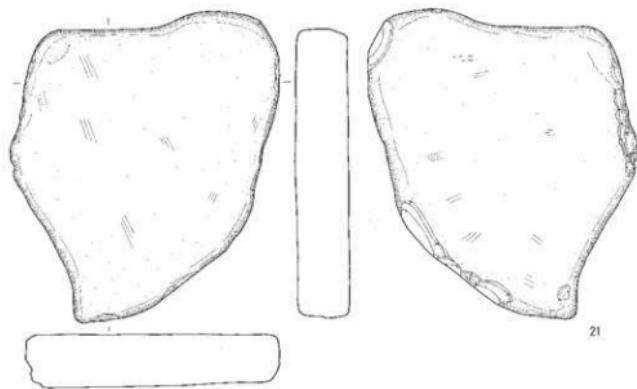
第17図 出土遺物2（土器2）



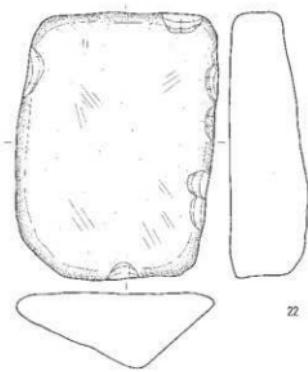
第18図 出土遺物3（土器3、石器1）



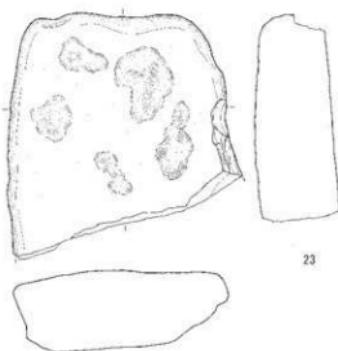
第19図 出土遺物4（石器2）



21



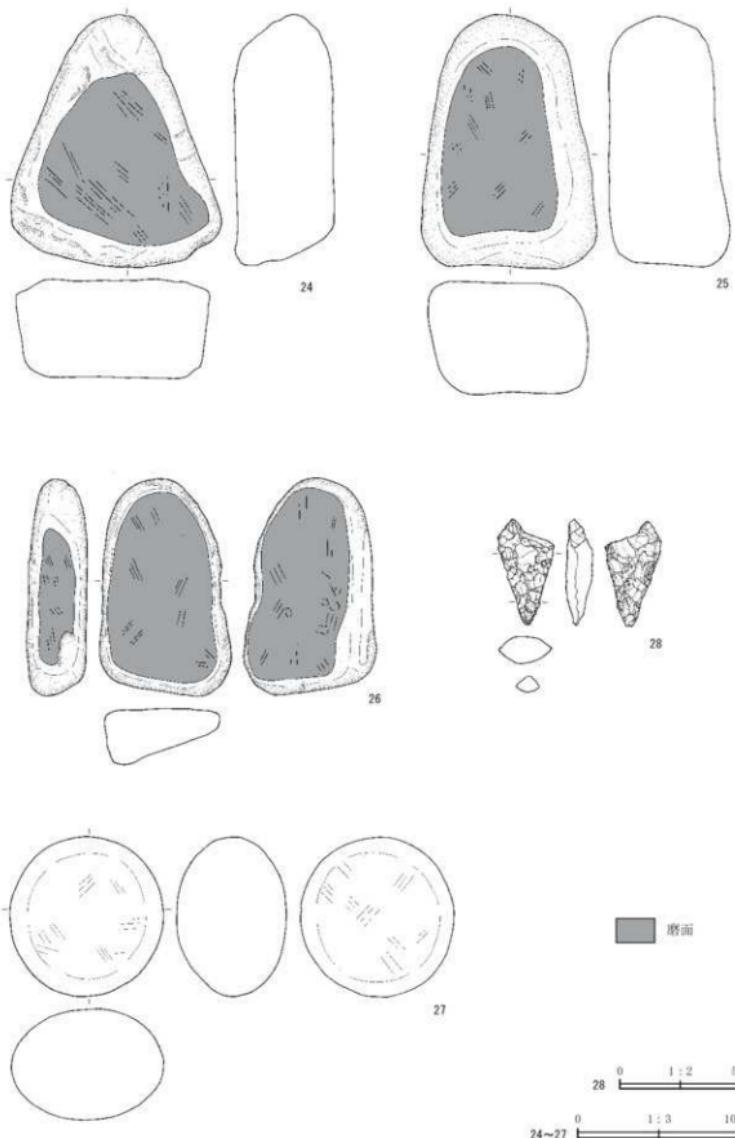
22



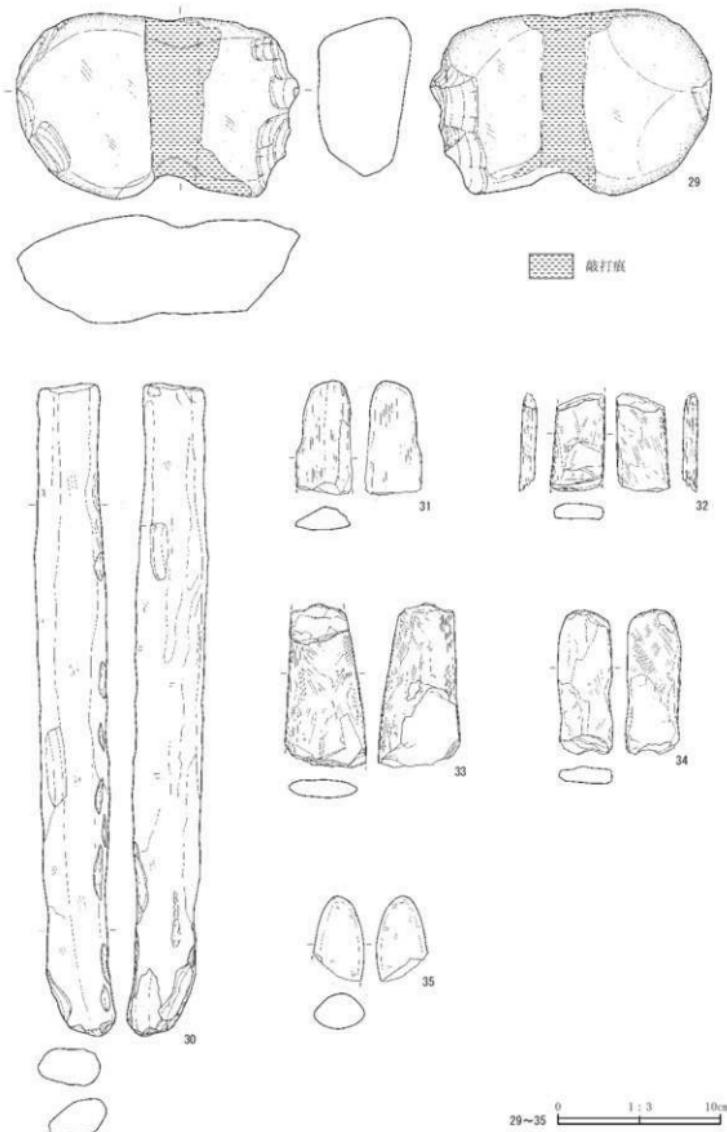
23

21~23 0 1 : 4 10cm

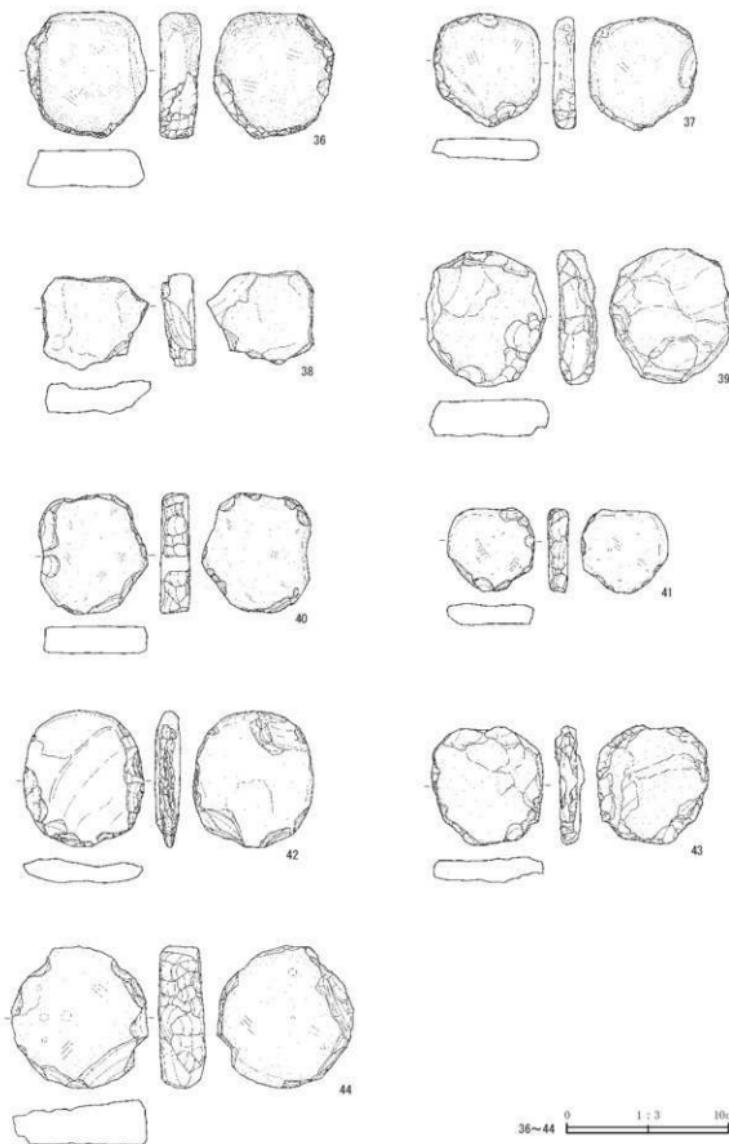
第20図 出土遺物5（石器3）



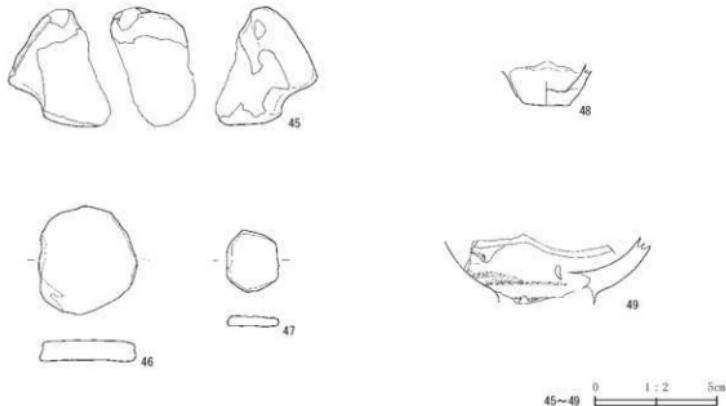
第21図 出土遺物6（石器4）



第22図　出土遺物7（石製品1）



第23図 出土遺物8（石製品2）



第24図 出土遺物9（土製品、陶磁器）

第6表 繩文土器観察表

No	出土地点・層位	器種	部位	外面文様等	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	図版	写真
1	2号炉供成面 I A19g 層	深鉢	口縁～体部	口縁小波状、内面に沈線文。口縁部沈線文、LR横	-	<19.3>	-		16	13
2	2号炉裏土 I A18g 層	深鉢	口縁～体部	口縁部小波状、沈線文。LR横	(26.0)	<10.1>	-		16	13
3	I A17f 層	深鉢	口縁～体部	口縁部に刻み、頂部沈線文。LR横	-	<15.2>	-	外面に撲付着	16	13
4	I A20f 層	深鉢	口縁～体部	口縁部に沈線文、口縁部沈線文、LR横	-	<8.0>	-	外面に撲付着	16	13
5	I A20f 層	深鉢	口縁～体部	口縁部に沈線文、口縁部沈線文、LR横	(26.0)	<10.7>	-	外面に撲付着	16	13
6	I A20f 層	深鉢	口縁～体部	口縁部内面に沈線文。口縁部小波状、沈線文、LR横	-	<16.4>	-		17	13
7	I A20f 層	深鉢	口縁～体部	無文、口縁内面に幅広の浅い沈線文	28.5	<31.7>	-		17	13
8	I A20f 層	深鉢	口縁～体部	沈線文、LR横・斜	(32.0)	<37.0>	-		17	14
9	I A20g 層	深鉢	口縁～体部	口縁部内面に沈線文、口縁部小波状、沈線文、LR横	(29.5)	<18.4>	-		17	14
10	I A20f 層	鉢	口縁～底部	口縁部内面に沈線文。口縁部小波状	14.3	17.2	6.6		18	14
11	I A20f 層	鉢	口縁～体部	口縁部口縁部刻み・凹凸の突起、内面に沈線文。LL LR横	20.0	<15.4>	-	外面に撲付着	18	14
12	I A20f 層	鉢	口縁～底部	口縁部に細かい刻み、内面に沈線文、口縁部沈線文、LR横	(10.2)	-	3.5	外面に撲付着	18	14
13	I A20f 層	蓋	口縁～体部	口縁部に小突起。口縁部・内面に沈線文	12.4	<7.6>	-		18	14
14	I A20f 層	注口	注口部	沈線文	-	-	-		18	14
15	I A20f 層	注口	体部	沈線文、継部沈線文。LR	-	<6.8>	-		18	14

※()は推定値、<>は残存値

第7表 石器観察表

No.	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考	図版	写真
16	2号伽伊石	石盤?	23.6	10.6	7.8	3380.0	ヒン岩 中生代白亜紀 北上山地	石盤?転用	18	14
17	2号伽底面	石盤類?	24.9	13.0	6.7	3023.4	花崗閃緑岩 中生代白亜紀 北上山地		19	15
18	I A17 g Ⅲ層	石盤類	16.4	15.8	5.9	2568.7	砂岩 古生代 北上山地		19	15
19	I A14 h Ⅲ層	石盤類	14.4	16.1	6.4	2097.2	ヒン岩 中生代白亜紀 北上山地		19	15
20	I A20 f Ⅲ層	石盤類	10.3	14.5	3.7	962.8	閃綠岩 新生代第三紀 奥羽山脈基盤		19	15
21	I A20 f Ⅲ層	石盤類	23.9	20.8	4.3	4371.0	ホルンフェルス 古生代 奥羽山脈基盤		20	15
22	I A20 f Ⅲ層	石盤類	21.8	16.1	6.1	3298.0	軽板岩 古生代 北上山地		20	15
23	I A13 h Ⅲ層	台石?	19.2	19.0	6.6	4091.0	細粒閃緑岩 中生代白亜紀 北上山地		20	15
24	1号伽伊石	磨石	15.4	12.8	6.0	1823.8	ホルンフェルス 古生代 奥羽山脈基盤		21	16
25	I A13 h Ⅲ層	磨石	15.3	10.7	7.2	2017.8	砂岩 古生代 北上山地		21	16
26	I A15 g Ⅲ層	磨石	12.9	8.0	3.4	543.3	ヒン岩 中生代白亜紀 北上山地		21	16
27	I A19 f Ⅲ層	磨石類?	9.7	9.4	6.8	891.8	砂岩 古生代 北上山地		21	16
28	I A20 f Ⅲ層	石錐	(4.3)	2.2	1.1	8.5	頁岩 新生代第三紀 奥羽山脈	摘み回欠損	21	16

第8表 石製品観察表

No.	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考	図版	写真
29	1号伽周辺 Ⅲ層	鍛錠状石器	11.3	17.2	6.6	1843.3	ホルンフェルス 古生代 奥羽山脈基盤		22	16
30	I A17 g Ⅲ層	右刃	(39.6)	4.2	2.2	616.2	ホルンフェルス 古生代 奥羽山脈基盤		22	16
31	I A19 f Ⅲ層	石刀?	(7.9)	3.4	1.4	47.2	頁岩 古生代 北上山地		22	16
32	I A19 f Ⅲ層	石刀?or右削?	(5.7)	3.1	0.9	31.9	軽板岩 古生代 北上山地		22	16
33	I A19 g Ⅲ層	石刀?	(9.9)	4.9	1.1	72.1	ダイサイト 中生代白亜紀 北上山地		22	16
34	I A20 f Ⅲ層	石刀?	(8.8)	3.2	1.0	53.8	軽板岩 古生代 北上山地		22	16
35	I A20 f Ⅲ層	石棒類	(4.9)	3.1	1.2	46.2	ペグマタイト 中生代白亜紀 北上山地		22	16
36	I A18 f Ⅲ層	円盤状石製品	7.7	7.3	2.6	241.6	細粒閃緑岩 中生代白亜紀 北上山地	五角形	23	17
37	I A19 g Ⅲ層	円盤状石製品	6.8	6.6	1.4	110.1	ホルンフェルス 古生代 奥羽山脈基盤	五角形	23	17
38	I A20 f Ⅲ層	円盤状石製品	5.5	5.4	1.8	97.6	花崗斑岩 中生代白亜紀 北上山地	五角形	23	17
39	I A20 f Ⅲ層	円盤状石製品	8.2	7.4	2.3	220.1	ホルンフェルス 古生代 奥羽山脈基盤	五角形	23	17
40	I A20 f Ⅲ層	円盤状石製品	7.2	6.4	1.6	156.8	砂岩 古生代 北上山地	五角形	23	17
41	I A16 g Ⅲ層	円盤状石製品	5.0	5.3	1.2	55.5	ダイサイト 中生代白亜紀 北上山地	五角形	23	17
42	I A19 g Ⅲ層	円盤状石製品	8.3	7.3	1.4	126.7	花崗閃緑岩 中生代白亜紀 北上山地	椎円形	23	17
43	I A18 f Ⅲ層	円盤状石製品	7.2	6.8	1.7	104.4	ヒン岩 中生代白亜紀 北上山地	多角形	23	17
44	I A19 f Ⅲ層	円盤状石製品	8.6	8.2	2.7	301.0	鍛岩 古生代 北上山地	多角形	23	17

第9表 土製品観察表

No.	出土地点・層位	器種	特徴・文様等	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	図版	写真
45	I A15 h Ⅲ層	土偶		—	—	—	40.4	陶?	24	17
46	I A19 f Ⅲ層	円盤状土製品	無文	—	4.4	4.0	0.8	16.2	24	17
47	I A19 f Ⅲ層	円盤状土製品	無文	—	2.5	2.1	0.4	2.8	24	17
48	I A19 f Ⅲ層	ミニチュア	無文	—	—	—	7.2		24	17

第10表 陶磁器観察表

No.	出土地点・層位	種類	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	時期	産地	備考	図版	写真
49	I A12 g (T2内)	磁器	細口	底部	—	<2.8	—	18C代	肥前	圓錐	24	17

VI 根城館跡

1 遺跡の立地

遺跡は、東日本旅客鉄道大船渡線折沢駅から北東方向に約4.3kmに位置し、東から西に向かって流れる砂鉄川が大きく蛇行して丘陵地上に立地している。推定される城域は東西250m、南北230mで総面積は約45,800m²で標高は115～155mを測る。

現況地形から推測できる遺構としては空堀、馬場跡、平場、主郭、二の郭、三の郭がある（岩手県遺跡情報検索システム）。館の築城年代については不明、城主については『仙台領古城書状』に「山根城東西22間南北18間二ノ丸東西21間南北9間城主千葉安房」、また『大東町史（上）』には「館主及川遠江守」との記述がある。

2 調査の概要

今回調査を実施した場所は周知の根城館跡の遺跡範囲の東側隣接地で、主郭から東側に延びる丘陵地の尾根を利用して郭の下位に位置する断崖斜面部が主で、調査対象面積は929m²、標高は約117～139m、調査前の現況は山林である。

調査区高位面の曲輪？と想定される平場状の緩斜面部分と堀の可能性のある低位面を中心に雜物撤去を行い、現況の写真撮影と地形測量を行った後、高・低位面の各2箇所にトレンチ（T 1～4）を設置し、堆積状況および遺構・遺物の有無を確認した。中間の急斜面部分については低位面との境界付近の位置に岩盤である花崗岩の巨礫が刺さりだしの状態であることが確認できる状況であったため、人為的な造成による切岸ではなく、自然地形と判断し、現況の地形測量のみによる調査に留めた。各トレンチの詳細は以下のとおりである。

T 1

調査区北西側、斜面高位面のIA4cグリッドを始点とし、斜面の傾斜に沿って南東方向に規模6.58×0.73mのトレンチを設置した。検出面標高は136.6～139.1m、傾斜度は17～27°で高位側が緩い傾斜をしている。堆積は斜面下位の地山（風化花崗岩）崩落層（4層）→黄褐色シルト層（3層）→にぶい黄橙色砂（2層）→にぶい黄褐色砂（1層：表土）の順であるが2・3層は人為的な地形変更による堆積の可能性が高い。底面の傾斜度は始点から3.30m付近まで約23°で、そこから39°の傾斜へと変わり、途中から深く落ち込んだ地形となっている。トレンチ内から遺構・遺物は見つからなかった。

T 2

調査区北東側、斜面高位面のIA2fグリッドを始点とし、斜面の傾斜に沿って南東方向に規模11.86×0.89mのトレンチを設置した。検出面標高は133.7～138.4m、傾斜度は始点から11m付近まで13°と緩く、そこから約42°の傾斜となる。堆積層は17層に分層したが、16・17層以外は人為的な地形変更に伴う堆積と考えられる。16層（黒褐色シルト層）から出土遺物がないため時期は不明であるが、古代以前と考えられる。17層は地山である。

T 3

調査区南東側の斜面低位面、IA 9 i・9 j グリッドを跨いで規模1.18×1.92mのトレンチを設置した。検出面標高は118.4～118.8m、傾斜度は始点から約9°の緩斜面である。堆積層は約1.3mの深さまで掘り下げ7層を確認したのち、一部を掘り下げ地山（8層）を確認した。いずれも自然堆積を呈し、残存状況が良好であったことから、基本土層に設定したがトレンチ内から遺構・遺物は見つからなかった。

T 4

調査区南西側の斜面低位面、IA 9 d グリッドを始点とし、規模5.57×1.42mのトレンチを設置し、掘削を行ったが、始点から3m先付近で深く落ち込んだ地形となり、掘削深度が2mを超えて地山が確認できなかっただが、崩落の可能性等の安全上の問題からそれ以上の掘削は行わず、記録写真のみに留めた。トレンチ内から遺物は見つからなかった。

3 検出遺構と出土遺物

今回の調査区内において遺構・遺物は見つからなかった。

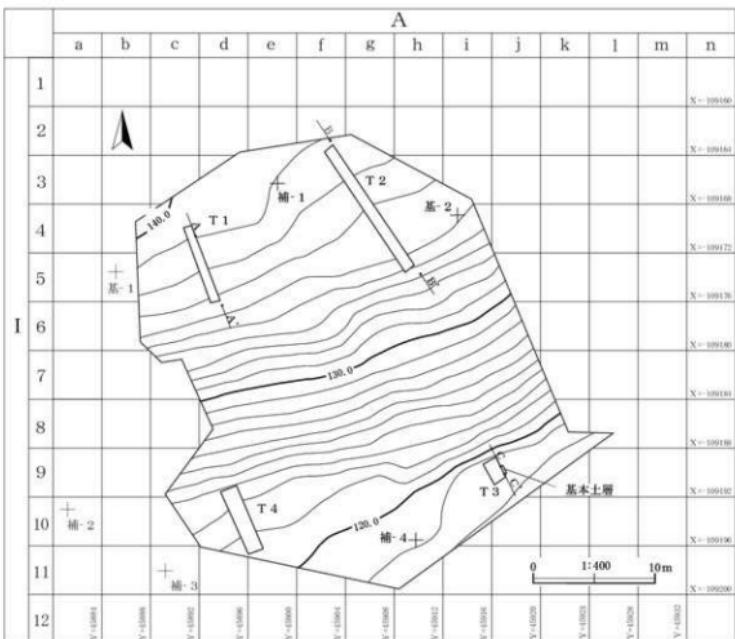
4 まとめ

今回の調査で中世城館である根城館に関連する遺構・遺物は見つからなかった。曲輪と想定された高位面の地形は現況では緩斜面であるが、造成前は急斜面であったことが判明した。造成の時期については時期を特定する遺物が見つかっていないため、詳細は不明であるが、堆積状況から、根城館の時期よりは新しい時期に行われたものであろうと推測される。また、今回の調査区は根城館の隣接地であるが、本調査区を含めた天然地形の崖錐部分はいずれも館の防御の一角を担った館跡の構成要素の一部と考えられ、北東に延びる尾根部分と付随する崖錐についても同様の可能性が考えられる。

<引用・参考文献>

大東町 1982『大東町史』上巻

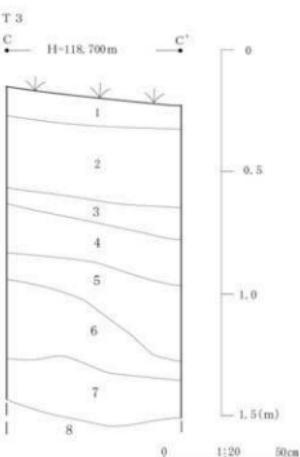
岩手県教育委員会 1986『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財報告書第82集



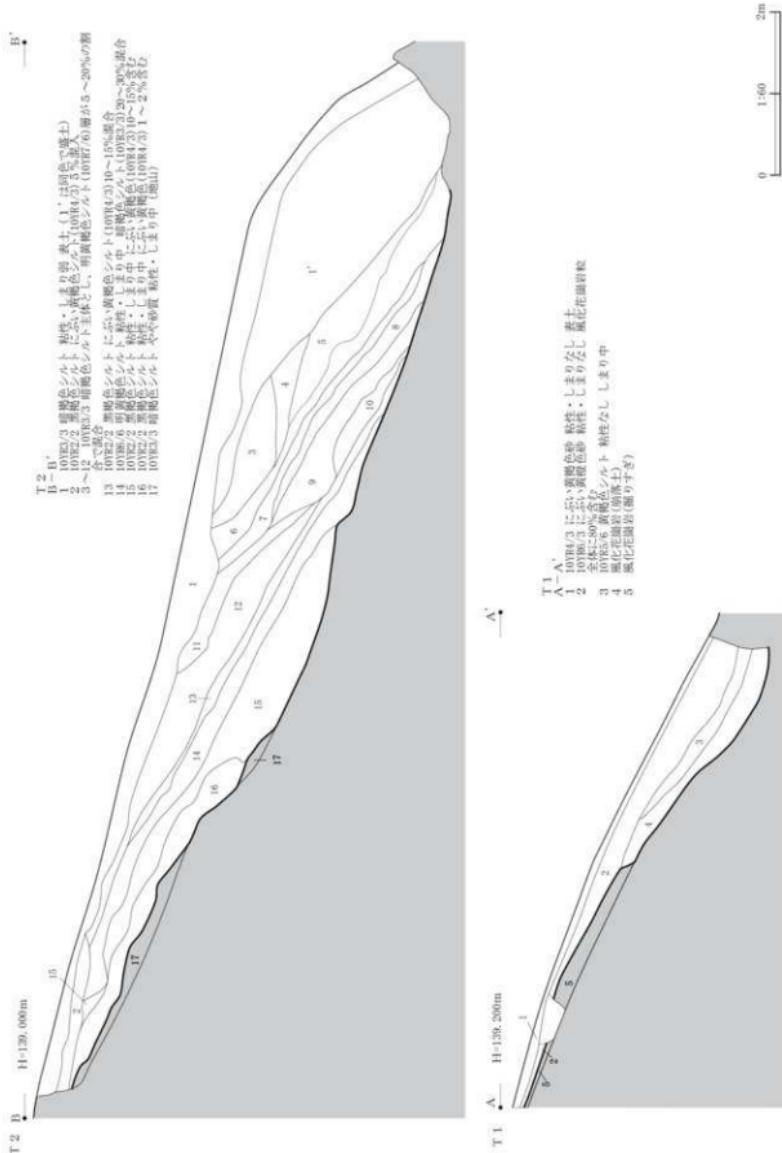
第25図 グリッドおよびトレンチ位置図

- T 3
C - C'
 1 表土 植物根多い 層厚約11cm
 2 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 水酸化鉄多く含む 層厚約20cm
 3 砂層 層厚約11cm
 4 10YR3/3 深い暗褐色シルト 粘性弱 しまり強 層厚約19cm
 5 10YR4/3 黒褐色シルト 粘性弱 しまり強 層厚約31cm
 6 10YR2/2 黑褐色シルト 黑褐色シルト 粘性・しまり中 層厚約31cm
 7 10YR2/1 黒色シルト40%、10YR2/2 黑褐色シルト40%、10YR5/6 黄褐色シルト20%の混合土層 粘性・しまり中
 8 10YR3/3 暗褐色シルト 地山(7層を一部振り下げ確認)

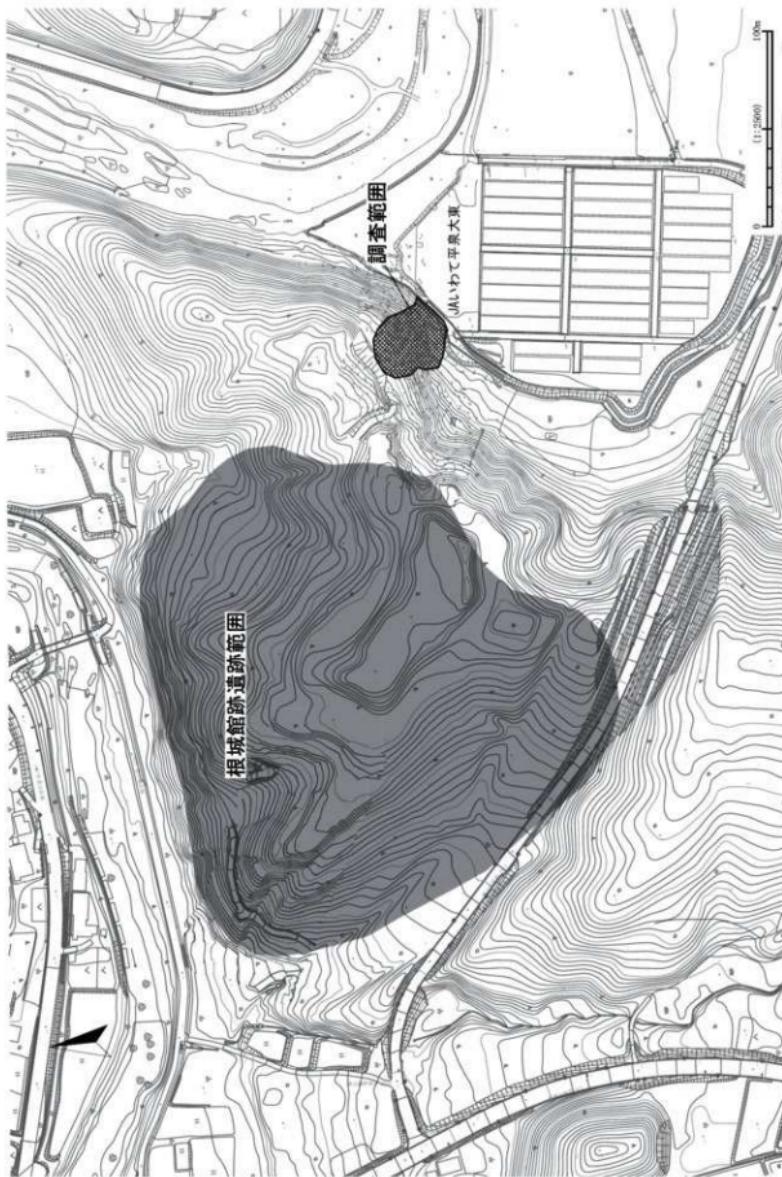
*層厚は最大値



第26図 T 3断面図（基本土層）



第27図 T 1・2断面図



第28図　遺跡範囲と調査区

写 真 図 版

下 渋 民 遺 跡 (写真図版 1 ~ 3、13)

勝 善 遺 跡 (写真図版 4 ~ 8、13 ~ 17)

根 城 館 跡 (写真図版 9 ~ 12)



遺跡遠景・S→



調査区全景・S→

写真図版1 航空写真、調査区



調査前風景・SW→



基本土層・N→

写真図版2 調査前風景、基本土層



1号溝全掘・S→



1号溝断面・S→



2号溝全掘・W→



2号溝断面・W→



3~5号溝全掘・SW→



3号溝断面・SW→



4号溝断面・SW→



5号溝断面・SW→

写真図版3 1~5号溝



調査区全景・上が東



調査区中央部近景・上が東

写真図版 4 航空写真



基本土層・NW→



調査前風景・S→



調査区南側トレンチ・NE→



調査区南側トレンチ断面・NW→



調査区北側・SW→

写真図版5 基本土層、調査前風景、調査区



1号炉稼出・N E→



1号炉覆土断面・N→



1号炉覆土断面・W→



1号炉全景・N→



1号炉燃焼部断面・N→



1号炉燃焼部断面・W→



2号炉稼出・W→



2号炉覆土断面・S→

写真図版 6 1・2号炉



2号炉覆土断面・W→



2号炉全景・W→



2号炉燃烧部断面・S→



2号炉燃烧部断面・W→



1号土坑完掘・S→



1号土坑断面・S→



2号土坑完掘・W→



2号土坑断面・W→

写真図版7 2号炉、1・2号土坑



柱穴状土坑全景・上が東



調査区中央部検出状況・N→



石剣出土状況・N→



作業風景・S→



調査区完掘（北側）・S→

写真図版8 柱穴状土坑、遺物出土状況、作業風景、調査区



道路全景・E→



調査区遠景・S E→

写真図版9 航空写真1



調査区近景 1・S E →



調査区全景・S →

写真図版10 航空写真2、調査区1



調査区近景2・S E→



調査区低位面近景1・E→



調査区低位面近景2・W→



調査区高位面平場・W→



調査区高位面平場～斜面1・W→



調査区高位面平場～斜面2・E→



調査区斜面部～低位面・W→



基本土層断面・SW→

写真図版11 調査区2、基本土層



T 1 全景・NW→



T 1 斜面上部側断面・W→



T 1 斜面下部側断面・W→



T 2 全景・NW→



T 2 断面・NW→



T 3 全景・SE→



T 4 全景・SE→



T 4 断面・SW→

写真図版12 T 1 ~ 4



1



2



3

下汎民遺跡



1



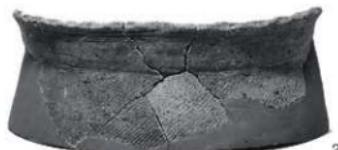
3



4



5



2



6



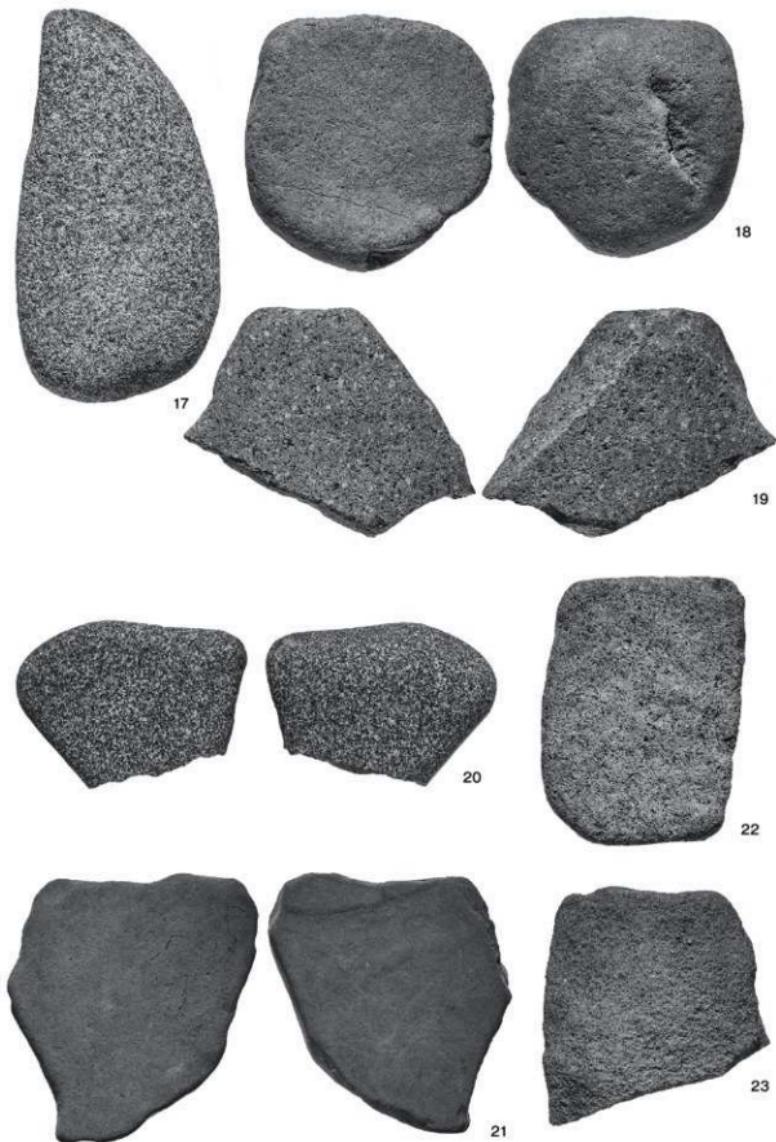
7

勝善遺跡

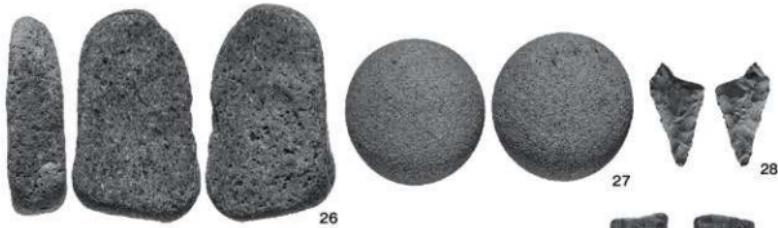
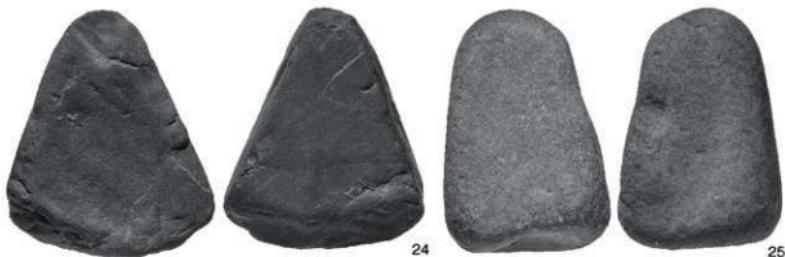
写真図版13 出土遺物1（下汎民遺跡、勝善遺跡）



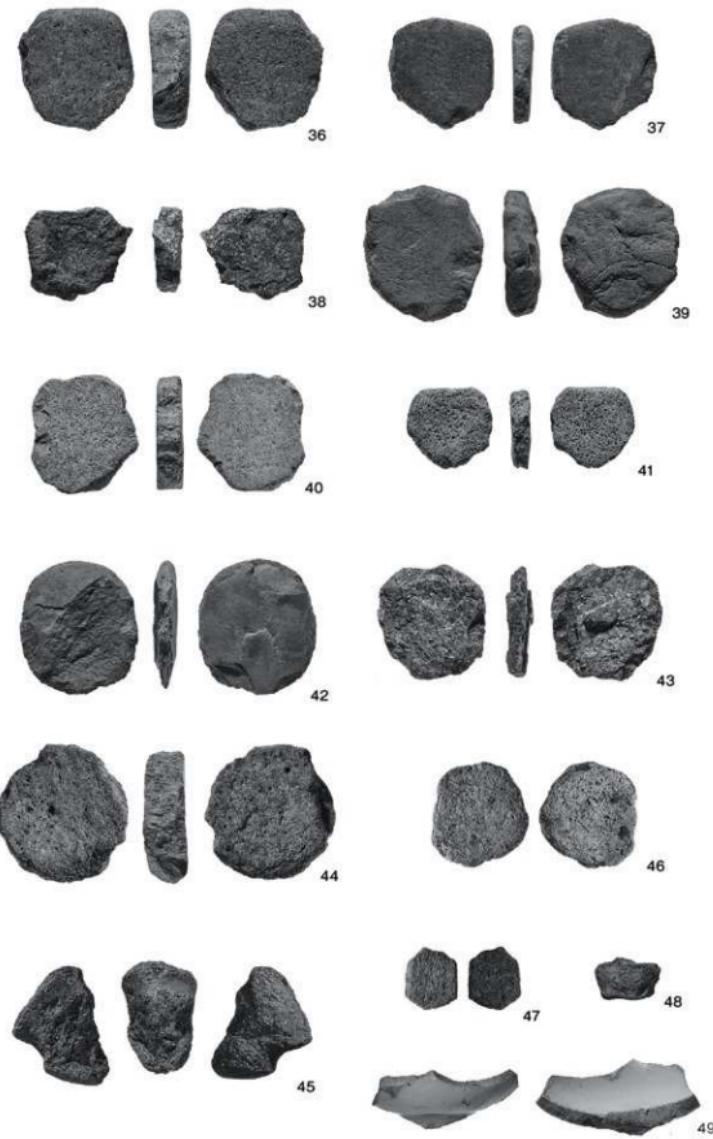
写真図版14 出土遺物2（勝善遺跡）



写真図版15 出土遺物3（勝善遺跡）



写真図版16 出土遺物4（勝善遺跡）



写真図版17 出土遺物5（勝善遺跡）

報告書抄録

ふりがな 書名	しもしぶたみいせき・しょうぜんいせき・ねじょうだてあとはくつちょうさほうこくしょ 下浜民遺跡・勝善遺跡・根城館跡発掘調査報告書						
副書名	地域連携道路整備事業（一般国道343号浜民地区）関連遺跡発掘調査						
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第731集						
編著者名	瀬 浩二郎						
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2021年2月26日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
しもしぶたみいせき 下浜民遺跡	岩手県一関市 大東町浜民字 門ノ上36番地 1地先ほか	03209	N F 60-0267	39度 01分 19秒	141度 19分 31秒	2019.07.01 ～ 2019.07.12	123m ²
しょうぜんいせき 勝善遺跡	岩手県一関市 大東町大原字 勝善52番地1 地先	03209	N F 61-1256	39度 00分 54秒	141度 22分 07秒	2019.07.09 ～ 2019.08.30	1,001m ²
ねじょうだてあと 根城館跡	岩手県一関市 大東町大原字 館下26番地ほか	03209	N F 61-1240	39度 00分 55秒	141度 21分 47秒	2019.09.01 ～ 2019.09.30	929m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
下浜民遺跡	散布地	縄文・平安・近世	溝	5条	縄文土器、土師器、石器		
勝善遺跡	集落跡	縄文	石圓炉 土坑 柱穴状土坑	2基 2基 45個	縄文土器、石器、土器、円盤状土製品、石刀、円盤状石製品、磁器		
根城館跡	城館跡	中世					
要約	<p>・下浜民遺跡は縄文・古代・近世の遺物散布地であるが、古代については遺物の出土状況から周辺に集落が存在する可能性が考えられる。</p> <p>・勝善遺跡は縄文時代晚期中葉の集落の一部であることが確認された。調査成果および地形を勘案すると集落の主体は調査区東側の斜面部に存在すると推測される。</p> <p>・根城館跡については館に関連する遺構・遺物は見つからなかったが、本調査区を含め、遺跡範囲に含まれていない東側の崖難部分はいずれも館の防衛の一角を担った館跡の構成要素の一部と考えられ、北東に延びる尾根部分と共に付随する崖難も含め、城域が広がる可能性が考えられる。</p>						

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第731集
下渋民遺跡・勝善遺跡・根城館跡発掘調査報告書

地域連携道路整備事業（一般国道343号洪民地区）関連遺跡発掘調査

印 刷 令和3年2月19日

発 行 令和3年2月26日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019) 638 - 9001

発 行 岩手県県南広域振興局土木部一関土木センター
〒021-8503 岩手県一関市竹山町7番5号

電話 (0191) 26 - 1418

(公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番地1号
電話 (019) 654 - 2235

印 刷 (株)橋本印刷
〒020-0061 岩手県盛岡市北山一丁目8番9号
電話 (019) 652 - 1354
